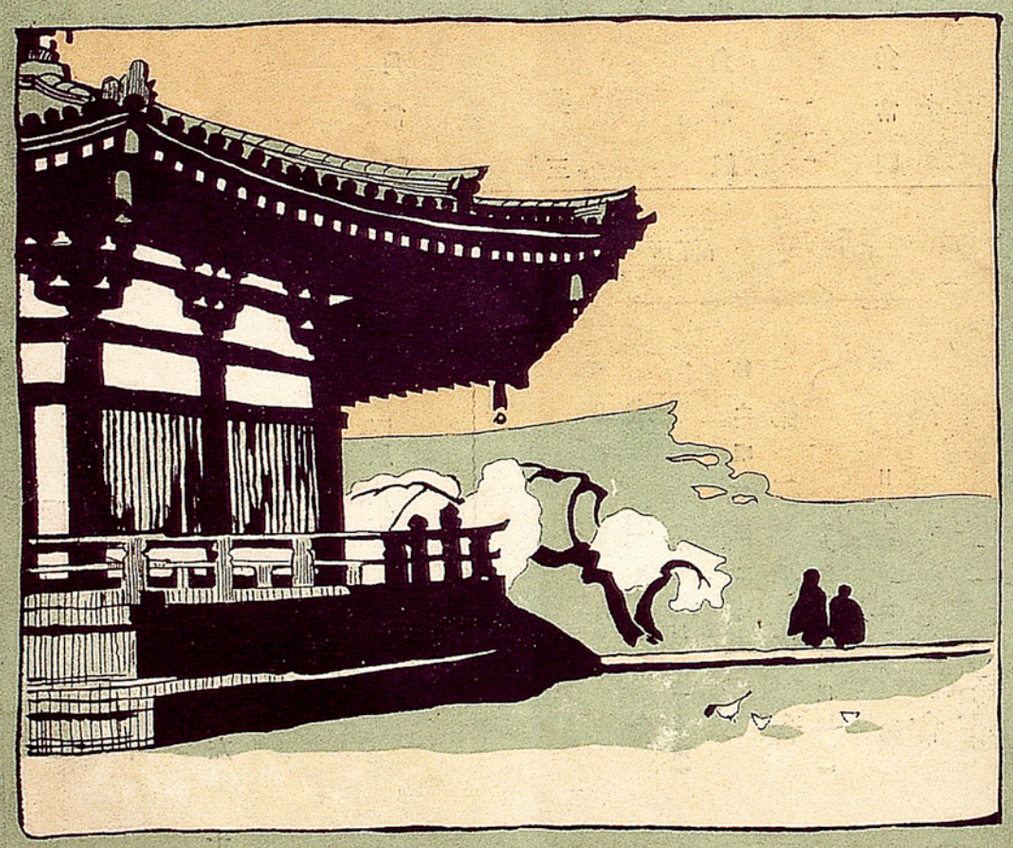
道求

第五卷第五號



求道第五卷第五號目次

◉本願　求道
講話

◉眞の佛弟子　近角常觀
告白

◉本誓重願空しからず　林英三
講義

◉歎異鈔—第八章、第九章　近角常觀
慶歎

◉眞宗慶歎　近角常觀
十二　眞佛假佛

歎咏

◉春光《長詩》　甲之

◉一日なりとも《短歌》　左千夫

時報

◉春李傳道概況◉四恩爪生會

講話

毎日曜午前九時
求道學舍
《本郷森川町一番地》

毎土曜午後二時
第二求道會
《九段坂佛教倶樂部》

毎月二日午後七時
第三求道會
《日本橋蠣殼町說教所》

求道

第五卷
第五號

本願

大菩薩法身の中に於て、常に三昧に在して、種種の身
種種の神通、種々の說法を現ずることを示すこと、皆
本願力より起れるを以てなり、

嗚呼久しい哉、佛敎の眞如の理論に囚はれたることや、夫れ眞如は哲學の原理に非す、世界の本體に非す、唯是れ佛陀本覺の境界にして十方の如來の來現したまふ所、如來常住の靈境にして吾人凡小の思議すべからざる法身也吾人は其境より放ちたまふ不可思議光に照されて初めて無明の闇を破り、慈光に攝取せられ終に西方寂靜無爲の都に入れるの時、法性の覺月速に顯はれ盡十方無碍の光味に一味にして一切の衆生を利益するを得ん、聖人證卷に曰く、必す滅度に至れば即是れ常樂なり、常樂は即ち是れ畢竟寂滅なり、寂滅即ち是れ無上涅槃なり無上涅槃は即ち是れ無爲法身なり、無爲法身は即ち是れ實相なり、實相は即ち是れ法性なり、法性は即ち是れ眞如なり、眞如は即ち是れ一如なり然れは彌陀如來如より來生して報應化種種の身を示現したまふと、讃に曰く、無明の大夜をあはれみて、法身の光輪さはもなく、無碍光佛としめしてぞ、安養界に影現する、と。

本願とは正に是れ此如來來現の根本の大願にして正覺阿彌陀法王が十方の衆生を觀そなはして、大慈悲大方便を以て救濟したまふ如來淸淨の願心也、嗚呼本願は無上法皇招喚の勅命也。嗚呼眞如にして大慈大悲の光ましまさずば、何ぞ無明の夢を覺まし、三毒の醉を覺さしめたまふ本覺如來の靈都と仰ぐを得ん、既に大慈大悲の光ましまさば大願本願の勅命なかるべけんや、吾人十方の衆生此大音宣布の招喚に接して初めて至心歸命の信樂開發するに至る、聖人曰く夫れ以みれば信樂を獲得することは如來選擇の願心より發起すと、又曰く若は行若は信。又若は因若は果、又若は住若は還、一事として如來淸淨願心の廻向成就したまふ所に非ざることあることなしと

本願とは畢竟大慈大悲の親心也、我等は毫も本覺明朗の境を知るべからず、何んとなれは是唯佛與佛の境なれば也、唯我等の仰ぎ得べきは此如來の我等に對する親心のみ、夫三世十方の諸の如來、其本覺一如の境に至りては畢竟同一也、然

るに此の如く其緣に隨て、攝化したまふ所以の者、畢竟其本願の各別なるが爲のみ善導大師曰く、諸佛の所證平等是れ一なれども、若し願行を以て來たし收むるに因緣なきに非ず、然るに彌陀世尊本と深重の誓願を發して、光明名號を以て十方を攝化したまふと、嗚呼彌陀佛の大慈大悲は畢竟其光明名號の因緣を成就したまふ選擇本願によりて我等の上に光闡したまふ也されば彌陀佛の彌陀佛たる所以は唯選擇本願の親心あれば也此親心ありてこそ初めて彌陀佛も顯現したまひ、此親心ありてこそ我等も親の大悲に浴するを得ん、聖人曰く、佛願の生起本末を聞きて疑心あることなし之を聞といふと、然らば抑々選擇本願の親心は何故に起れるか。吾人は泝りて抑々選擇本願の生起本末を知らざるべからず

元祖聖人曰く、第十八念佛往生の願とは彼諸佛の土中に於て、或は布施を以て往生の行と爲すの土あり、或は持戒を以て往生の行と爲すの土あり、或は忍辱を以て往生の行と爲すの土あり、或は精進を以て往生の行と爲すの土あり、或は禪定を以て往生の行と爲すの土あり、或は般若を以て往生の行と爲すの土あり或は菩提心を以て往生の行と爲すの土あり、或は六念を以て往生の行と爲すの土あり、或は持經を以て往生の行と爲すの土あり、或は持咒を以て往生の行と爲すの土あり、或は孝養父母奉事師長等種々の行を以て往生の行と爲すの土あり、或は專ら其國の佛名を稱して往生の行と爲すの土あり即今前の布施持戒乃至孝養父母等の諸行を選び捨てゝ、專ら佛號を稱するを選び取る故に選擇といふ也、若し夫れ、造像起塔を以て本願と爲さば貧窮困乏の類定て往生の望を絶たん、然るに富貴なる者は少く、貧賤なる者甚た多し、若し智慧高才を以て本願と爲さば、愚鈍下智の者定て往生の望を絶たん、然るに智慧なるは少く、愚痴なる者甚た多し、若し、多聞多見を以て本願と爲さは少聞少見の輩定て往生の望を絶たん、然らば多聞なるものは少く少聞なる者甚た多し若し、持戒持律を以て本領と爲さは破戒無戒の人定て往生の望を絶たん、然るに持戒の者少く、破戒の者甚た多し、自餘の諸行之に準せよ應に知るべし、當に知るべし、上の諸行等を以て本願と爲さば皆往生を得る者少く往生せさる者多し、然れは則彌陀如來法藏比丘の昔、平等の慈悲に催されて普く一切を攝せんが爲に、造像起塔等の諸行を以て往生の本願と爲さす。唯稱名念佛の一行を以て其本願と爲す也。と嗚呼是れ選擇本願の生起本末なる者に非ずや

元祖聖人一代の大獅子吼は畢竟此選擇本願の親心を五濁の我等に示したまはんか爲にあらずや、聖人讃して曰く、智慧光のちからより、本師源空あらはれて、淨土眞宗をひらきてぞ選擇本願のべたまふと、されば稱名念佛は決して我等の行にあらず、我等の善にあらず、直に是れ如來の選擇本願の親心也、親心の塊也、聖人釋して曰く、歸命とは本願招喚之勅命也と、是如來大慈大悲の親心より無明罪惡の我等を喚ひたまふ親の喚聲也、又曰く、發願廻向といふは如來已に發願して衆生の行を廻施したまふの心也と、是如來の親心悲憫矜哀の涙やるせなく、超世の大願を起し、不可稱不可說不可思議の親心を我等に與へたまふ也、又曰く即是其行といふは選擇本願是也とは是本願に誓へる念佛也との謂にあらず、選擇本願の親心の塊即念佛也との仰せなり、然らは南無阿彌陀佛即ち是れ選擇本願の親心也、貧窮困乏、愚鈍下智、少聞少見、破戒、無戒にして父母に孝養せず、師長に奉事せざる逆惡の我等を憐愍したまふ大慈大悲の親心也、

此親心こそ即ち如來淸淨眞實の至心に非ずや、聖人曰く、如來一切苦惱の衆生海を悲憫したまひて不可思議兆載永劫に於て菩薩の行を行したひしとき、三業の修したまふ所、一念一刹那も淸淨ならさることなく、眞心ならさることなしと、此眞實淸淨の親心こそ即如來の大慈大悲の信樂に非ずや、此大慈大悲の親心こそ我國に生れんと欲へと如來我等を招喚したまふの勅命にして我等か上に差し向けたまふ如來大悲の廻向心に非ずや、論に曰く、如何か廻向したまへる、一切苦惱の衆生を捨てずして心に常に作願すらく、廻向を首として大悲心を成就することを得たまへるか故にと廻向に二種の相あり、一には往相、二には還相乃至若は往若は還、皆衆生を拔て生死海を度せんか爲也と、嗚呼此の如く、行も信も往相も還相も皆是れ畢竟如來淸淨願心の親心より廻向成就したまはさるものなし聖人二門偈に宣はく、無碍光佛因地の時、斯弘誓を發し、此願を建て、菩薩已に智慧心を成し、方便心無障心を成し妙樂勝眞心を成就して速に無上道を成就することを得て、自利利他の功德を成したまふ、則ち之を入出の門と名く、婆藪槃頭菩薩の論、本師曇鸞和尙釋したまへり、願力成就を五念と名く、佛よりして言へは利他と云ふべし、衆生よりして言へば他利と云ふべし、當に知るべし今將に佛力を談せんとすることをと、是れ實に法藏大菩薩、法身海より出現したまへる如來利他の本願力にして、聖人釋して他力と言ふは如

來の本願力也と宣ふ所以也、

嗚呼此の如き親心を以て法藏菩薩は一如の境より來生したまひて超世の大願を選擇したまへり、三世十方の如來は同しく一如の境より來生したまへるも畢竟此無碍光如來の本願即親心を知らしむるが爲也、釋尊亦同しく一如の都より五濁惡世に應現したまふも亦此本願の親心を知らしむる爲也、已今當の淨土往生人一たび寂靜無爲の樂に入りぬれば同しく一如の境より來生して煩惱の林に遊ひて神通を現し、生死の薗に入りて應化を示す所以のもの此本願力の廻向にして亦生々世々の父母兄弟をして此大慈大悲の本願即ち親心を知らしむる爲に非ずや、嗚呼大なる哉本願、偉なる哉本願、此本願在しまさすば、無上法皇の如來在さず、三界の敎主釋尊在さず十方三世の諸佛在さず、無量世界に於てける寂滅平等の應化の菩薩在しざるべし、此本願あるか爲に恒沙塵沙の如來は十方三世の世界に出生し、無量無數の菩薩は隨緣應化して種々の身種々の神通、種々の說法を現したまふ所以也釋尊彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらか無上の信心を發起せしめたまひけりとは洵に此親心の人生に顯現したまふ大聖矜哀の善巧に非ずや嗚呼大なる哉本願、偉大なる哉本願、

講話

眞の佛弟子

《求道學舍日曜講話》

近角常觀

今日の題は『眞の佛弟子』と出して置きました。之は親鸞聖人の「敎行信證」の中、「信卷」の中に、眞の佛弟子といふ意味を解釋して下された御文があるのであります。

眞の佛弟子と言ふは、眞の言は僞に對し假に對するなり。弟子とは釋迦諸佛の弟子なり。金剛心の行人なり。斯の信行に由つて必ず大涅槃を起證すべきが故に、眞の佛弟子と曰ふ。

即ち「まことの佛弟子といふのは眞實佛陀の大悲を頂く行者の事である、金剛信の行人の事である」といふお示であります。

私は先日來段々と此の御言葉を味はせて頂いて實に意味の深い事に氣附かせて頂いたのであります。初めは左程に深い意味とも思つて居なかつたのであるが、佛の廣大なお惠みを喜ぶ者こそ眞實の佛弟子であるとは、隨分思ひきつた言方である。もう此の一言で如來甚深の思召は充分頂く事が出來ると思ひます。夫て此の以上に別に言外の意味を求めるといふ必要は毫も無いのでありますが、其後私が聖人の「敎行信證

を拜讀しつゝ此頃に於て特に感じました事は、何うも此の御言葉が聖人の一代から推すと、若しや斯ういふ道筋から出たのてはないかと、氣が附いた事てあります。夫は何かと言ふに、親鸞聖人が道を求め給うた動機、導きとなつたと昔より言ひ傳へて居るのは、聖人が拾九歲の時に、磯長の聖德太子の御廟に參詣せられて、太子の夢の告げに一つて、我が命根今後十年と氣附かれたといふ事てある。此時痛切に人生の無常を感じられたのが聖人の入信の基てあると申傳へる事てある。之は一昨年來度々お話した通りてあります。其時の夢の告げの御文といふは、即ち

我れ三尊塵砂界を化す。　日域大乘相應の地なり。
諦に聽け諦に聽け我敎令す。汝の命根應さに十餘歲なり。
命終れば速に入る淸淨土。　善信善信眞菩薩。

此の御文てある。

先づ文の意味から申しますと、我れ三尊といふは、聖德太子、と母君間人皇后と御妃膳妃の三尊てある。此の三尊は即ち彌陀觀音大勢至の三尊てあります。磯長の御廟が三骨一廟三尊の位に形どられた事は、既に度々申した通りてあります。そこて此三尊が塵砂界と言つて、塵、砂のやうに澤山なる世界の衆生を化益して居て下さる。日域大乘相應の地なりて我が日本こそ實に大乘の廣まり給ふ可き土地てある。諦に聽け諦に聽け、今我が敎ゆる處を諦に聽け。汝親鸞の命根は今後もう十餘歲しか無いぞ。命終れば速に入る淸淨土、善信善信眞菩薩、と言ふのてあります。聖人は此の御告げを得て自分の生命はもう拾年てあると考へられたから、ぢつとして居られ無くて、頻りに出離の要法をお求めなされた。之は人生は誰でも此點になると、安んじて居る事が出事ぬのてあります。其處で聖人は十九歲の時より廿九歲の時迄、十年間は何としても安心せねばならぬといふお考から、頻りにお苦しみなされたのてある。而して事實は廿九歲の春、同じく聖德太子の御建立なされた六角堂に參籠なされて、其歸り道に聖覺法印と四條の橋の上てお遇ひなされ、其の御導きて法然上人の許に參じて、玆に初めて多年の宿志をお達しなされたのてある。之は皆さんが御存知の通りてある『所謂『御傳鈔』』に「建仁三年春の頃、聖人廿九歲隱遁の志に引かれて、源空上人を吉水の禪房にたづね參り給ひき」とある處てあります。

偖て此時法然上人の御敎化は何うてあつたかと言ふに、何も外の事は仰せられぬ、唯撰擇本願念佛の廣大なる味はひを御說きなされたのみてある。佛が一切衆生に向ひ給ふに、外の事は一も無い、唯撰擇本願南無阿彌陀佛の廣大なる御惠み一つが佛の御意てある。我々は此の御惠みを喜んて南無阿彌陀佛、々々々と稱へさせて頂く計りてあると、此事を懇々とお話しなされた丈てある。「佛は我々に戒を持てと仰せられぬ、我々に座禪をせよとは仰せられぬ。佛は我々に修養をして來いとは仰せられぬ。佛は我々を智識德行て助けやうとは、一言も仰せられないのてある、抑も斯くの如く如何程苦しんても一善一行も出來ぬ我等なればこそ、佛は無涯の大悲を以て、念佛の一つを撰擇して下されたのて無いか。此の廣大なる大悲の親心に氣が附けば、「あゝ有り難い、南無阿彌陀佛」と頂くばかりてある。南無阿彌陀佛は佛が我々の心中を見

拔きて撰擇して下された念佛である。惡人の我々、下劣の我々、若し自分の行て行けるならば、念佛は入らぬ。諸の觀念でゆけるならば、大悲は入らぬ。けれども如何程苦しみても何とも仕て見やうなき我々でないか。然るに佛は其處を見拔きて、廣大なる大悲心より、唯南無と頂く一つて助けて下さるのてある。而して此心を一切の衆生に屆け度いといふ御親心が即ち佛撰擇の本願てある。」と、此事を法然上人は懇々とお說きなされたのてあります。而して親鸞聖人は此の御敎化を聽いて「あゝ有り難き撰擇の本願であつた」と、其儘お受けなされたが聖人の信仰てある。

私は味へは味ふ程、法然上人が撰擇本願をお說きなされた具合が、如何に力强かつたかを思ふのてあります。若し此時上人が此の絕對のお惠みを、斯く一言て示され無かつたら、殆んど他力信仰を說く事は出來なかつたらうと思はれるのてある。譬へば法然上人が、他の經を讀むも宜しい、他の佛を拜んてもよい、他の名號を稱へてもよい、とおほせられたなら、第一我々は何うしても此の絕對の敎を仰ぐ事が出來なかつたてあらう。然るに上人は、我々は如何なる手段、如何なる觀念、如何なる修行を凝しても、夫て助かる我々では無い。が其者を佛は選擇本願南無阿彌陀佛の一法を以てお救ひ下さるのてある。南無阿彌陀佛は、此方て稱へよ、助けるとの仰せてはなくて、大悲の親が茲に居るぞとの佛の御名乘りてある。我々は唯此の撰擇本願に從ひて、あゝ有り難いと頂くのみてあると、絕對に大悲の一面をお示し下さるばかりて、此の外には何事も仰せられなかつたのてあります。

念の爲め申しますが、我々勵もすると、法然上人は溫順玉の如き人、優しき人、角の無き人、唯南無阿彌陀佛を喜ぶ御敎化故、法然上人の敎えは春風の如くてある、一も外の敎を彼是仰せられるやうの事は無いのてある、といふ風に思ひ易いのてあります。けれども度々言ひますが、『選擇集』を拜讀すると、實に際どい事を仰せられてあるのてある。夫は何うかといふに、選擇集の御敎化は、唯南無阿彌陀佛の一てある、此の外には何も無い、我々は餘の行では助からぬのてある、否我々に餘の行が出來ぬからではなく、もと〳〵佛の本願に於て念佛以外は凡て皆切り捨てられて仕舞うて居るのてある。故に戒行ても助からぬ、座禪ても助からぬ。慈悲で助かるのては無い、堂塔起立父母孝養て助かるては無い。唯南無阿彌陀佛の一法を喜ぶ一つて助けて下さるのてある。其の代はり如何なる惡人でも此念佛の稱へられぬ者は無い。此の貴き念佛の一つてある。」といふ手强き御敎化なのてあります。法然上人は一切經を六度迄も讀まれたと言ふが『選擇集』には一個所も夫が引かれて居無いのてある。唯淨土の三經、其外は眞宗の高僧善導大師、道綽禪師等の御文をお引きなされた丈てある。最後には自分は善導一師によると迄、言ひ切つて居られるのてあります。夫は何故かといふに、善導大師は阿彌陀の化身てある、三昧發得の人てある、阿彌陀佛の御指圖て書かれた善導大師の御聖敎てある、故に自分は善導一師による」と言つておいてになるのてある。「そんなら懷感禪師も三昧發得の人ぢや無いかと言ふに、懷感禪師は善導大師の弟子てある、故に自分は懷感禪師を用ゐる事が出來ぬ。然らば道綽禪師は

善導大師の師ぢや無いかと言ふに、例へ師ても道綽禪師は未だ三昧發得の人て無いから、之を用ゐる事は出來ぬ。阿彌陀佛の本願は唯南無阿彌陀佛の一法てある。自分は此の一法をお說き下された善導大師一師による外は無い」と實に際どき點まて言つておいてになるのてあります。

二三日前つい芝の增上寺に參る事があつて聞きますと、淨土宗では大層善導大師をまつるさうてある。之は如何にも上人の信仰からは、さうなるだらうと思ひます。極端に言へば『選擇集』一部の信仰は殆んど善導大師から來て居ると言つてもよい位てある。處て茲が甚た狹いやうてあるが、決してさうては無いのてす。若し法然上人が、自分は選擇本願念佛に據るが、併し何てもよい、座禪をやるもよい、陀羅尼を讀むもよいといふ位ならば、彌陀の選擇本願は入らぬのてある。聖道門を投げ捨てゝ淨土門に入り、自力を拋ちて他力に入る必要は無いのてある。けれども今我々は如何しても餘の行餘の善ては助かる見込の無いものてある。而して其者なればこそ佛は餘行餘善を切り捨てゝ、唯念佛の一行を以て助けると誓つて下されたのてある。餘行餘善に心を寄する者は畢竟此の佛の大悲に背く者てある。此の親の惠み以外に、一點ても自力を雜ふるは非常なる間違てある。法然上人は本願を喜ぶ半面として勢ひ此點を嚴しくお示し下されたのてあります。法然上人の眼には、一切經も彌陀の本願南無阿彌陀佛の、前には眼に入ら無かつたのてある。斯くの如く唯念佛の一行をお說き下されたが、法然上人の御敎化てあります。

偖て法然上人より此選擇本願の御敎化を受けて「親鸞にお

きては唯念佛して彌陀に助けられ參らすべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なきなり」と其儘頂かれたのが、親鸞聖人の信仰てあります。若し法然上人が此の嚴しき御化導をして下さら無かつたなら、親鸞聖人の信仰も無かつたのてある。又上人御自身も流罪にお遭ひなさる事も入らなかつたのてある　何故上人が御流罪にお遭ひなされたかと言ふに、此の廣大なる御惠みを皆んなに知らせ度いといふ御意から、自力て無い、聖道門てないと飽迄嚴しくお示し下されたからてあります。其の御敎化を其儘頂く者にはこれ程有り難い事は無いのてあるが、其惠みを喜ばぬ當時の聖道門自力宗の人達には、どの樣に此の御敎化が憎く〳〵しく聞えたかも知れぬ。如何にも法然は惡魔てある、惡魔の再來てあると思へたてあらうと、思はれるのてあります。當時の碩德梅尾の明惠上人は、『摧邪輪』といふ者を著して、全力を盡して上人を攻擊なされたといふ事てある。けれども、上人にして見れば、設ひ世間が何と爲ようとも、此の本願大悲の御惠みを國中の衆生に知らさねばならぬ、此の廣大なる大悲の親樣を知らずして、皆んなが迷うて居るのは實に勿體ない、といふ御考から、上人は飽迄遠慮なく本願念佛の一道を絕叫して下されたのてあります。而して此仰のまに〳〵、頂いて、唯念佛して彌陀に助けられ參らするのてあると喜ばれたが、親鸞聖人の他力信仰てあります。

茲て初めに申した聖德太子の夢の告げに戻つて頂いて見るに、此の廣大なる法然上人の御敎化を受け給ふなり、今迄十年間、命のある中にと焦つてお出になつた心は、忽ち彌陀大

悲の本願に安心なされたのてある。佛の御惠み南無阿彌陀佛の六字を頂いて、忽ちに安心が得られたのてあります。偖て安心なされてから十年昔の夢を振り反つて見ると、「命終れば速に入る清淨土、善信善信眞菩薩」――之は唯私の考を申上げるのて、私の考が正しいか否かは知りませぬが、この夢の告げは高田の『正統傳』に出て居るのてあります。若し此の御夢想が眞實とすれば、茲に「命終れば速に入る清淨土。」とある は、壽命の終る意味ではなくて、長き〳〵迷の生命が終る意味てあつたのてある。法然上人の一言の御敎化の下に、本願の一道て、今迄の流轉の生命が終りて、攝取不捨の惠みにお入りなされたのてある。廿九歳春の時、命は終るは終つたが、其命は娑婆の壽命てはなくて、長の迷の命てあつたのてあります。而して其の變化は實に速にてある、一念有り難き如來の大悲と氣附くなり、電光石火の如く速に今迄の迷の生命を脫して、如來の光明中に、生れさせて頂く事が出來るのてある。故に特に速といふ文字が用ゐられてあつたのてある。

私が斯く申すと甚だこじつけのやうてありますが、此の間二月の廿二日、聖德太子の命日の日「求道」の社說を書きつゝ氣が附いたのてありますが、親鸞聖人の『愚秀鈔』の中に次の御文があるのてあります。

眞實淨信心ハ內因ナリ。攝取不捨ハ外緣ナリ。

信ニ受スルハ本願ヲ前念命終ナリト　即入正定聚之數文。

即得往生ハ後念即生ナリ　即時入必定文。又名必定菩薩也文。

他力金剛心也ハ應レ知。

便同ニ彌勒菩薩。自力金剛心也應知。一大經言功如彌勒文。

前念命終後念即生といふ文字はもと善導大師の御言葉て、前の瞬間に命が終はれば、次の息には既に極樂に生れて居るといふのてある。處が親鸞聖人は此前念命終、後念即生を娑婆の命が終つて死ぬる時の事とはせずして、彌陀の本願が聞えて下された一念の上にお取りなされてあるのてあります。どうも一寸と考へると、本願を聞いた時に命が終るといふのは、意外千萬てある。けれども茲を前の夢の御實驗から頂くと、すつきり一致して來る事に私は氣附いたのてあります。夢の告げに「命終れば」とある命は、聖人は實際に於て廿九の時に死ぬてお出にならぬ。死ぬてはお出にならぬが、迷の生命は此時法然上人から彌陀本願の大悲をお聞きになると同時に終つて居るのてある。私當今此の『愚秀鈔』の御文は、聖人が此の御實驗て、仰せられたのてはないかと思ふのてあります。――「本願信受するは前念命終なり、……又必定の菩薩と名づくるの文　他力の金剛心也と知る應し、便はち彌勒菩薩と同じ。自力の金剛心なりと知るべし、大經に次て彌勒の如しと言ふの文」――彌勒菩薩の自力の金剛心て、次の生に佛となり給ふのてある。我々は又他力の金剛心、即ち如來の本願力て次の生には佛として頂く。つまり、彌勒菩薩と同じ仕合はせを得て居るのてある。而して此の味は、「命終れば速に入る清淨土、善信善信眞菩薩」といふ靈告とどうもぴつたり合ふやうに思はれるのてあります。

猶ほ亦聖人が太子の夢のお告げて信仰をお求めなされ六角堂參籠の歸り路に、法然上人を御訪ねなされ、彌陀選擇の本願を聞いてお喜びなされた其御心持は、『和讃』によくお示な

されてあるのてあります。

佛智不思議の誓願を、　聖德皇のめぐみにて、
正定聚に歸入して、　補處の彌勒のごとくなり。

聖德皇の御惠みて法然上人に遇ひ奉り、本願を承はつた一念に、今迄の迷の夢醒めて、正定聚に歸入して、補處の彌勒と同じ仕合せを頂いたといふ御喜の御和讃てある。此和讃て見ても今の考へが彌々確かなやうに思へるのてある。

大慈救世聖德皇、　父のごとくにおはします、
大悲救世觀世音、　母のごとくにおはします。

聖人が如來の御惠みを父の如くてある、母の如くてあるとお喜びなされた源は、實に聖德太子の御導きをお喜びなさる處から來つたのてある。

序に申しますが「命終れば速に入る清淨土、の速の字が、又聖人の一代御敎化の中に澤山に出てあるのてある。何うも之て見ると、聖人は又此の速の字を非常に喜ばれたものらしいのてあります。先づ第一に聖人の畫像の讃の文には、――聖人は此文を特に愛せられたものと見えます。

彼の佛の本願力を觀ずるに、もう値うて空しく過ぐる者無し。能く速かに功德大寶海を滿足せしむ。

とある。茲の速かにの一語抔は實に力强いのてある。一度佛廣大の本願力を聞いた者は、一人と雖も空しく終るものは無い。皆な速かにに功德大寶海に入らせて貰ふのてあると、もう腹一杯に親の御惠みを頂いたあまりの言葉てある。も一つは天親菩薩の『淨土論』の終にある

菩薩は是の如く五門の行を修して自利々他して、速に阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得給へるが故に。の文てあります。之を曇鸞大師は論の『註』に於て、釋解なされて、阿耨多羅三藐三菩提を成就するとは、早く佛になるといふ事てある、とお示し下されてある。其文は次のやうてあります。

阿耨多羅藐三藐三菩提を成就することを得給へるが故に。――佛得る所の法を名けて阿耨多羅三藐三菩提と爲す。此菩提を得給ふを以ての故に名けて佛となす　今速に阿耨多羅三藐三菩提を得ると言へるは、是れ早く佛を作る事を得給へるなり。阿をば無に名く、耨多羅をば……經には之を譯して名けて無上正徧道と爲す。……道とは無碍道なり。經に言く十方無碍人一道より生死を出て給へり。一道とは一無碍道也。無碍とは生死即涅槃なりと知るなり云云。

猶ほ之より進みて、其阿耨多羅三藐三菩提を得るに速にとは如何なる譯か、といふ事になつて、

問て曰く、何の因緣有てか、速に阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得と言へるや。答て曰く、論に五門の行を修して、以て自利々他成就し給へるが故にと言へり。然るに寂に、其本を求むれは　阿彌陀如來を增上緣と爲るなり。……彼の菩薩人天所起の諸行は皆阿彌陀如來の本願力に緣るが故なり。何を以て之を言ふとならば、若し佛力に非ずは四十八願便ち是れ徒らに設け給ふらん。今的しく三願を取つて用ゐて義の意を證せむ

と。即ち今私が東京に居るも、明日忽ち九州の涯に行く事が出來る。之は何かといふに、汽車の力に緣るが故てある。之

と同じく我々が何故速に佛に作る事が出來るかといふに、徧に彼の佛の本願力に緣るが故であると知らして下されたのであります。而して之より四拾八願の中三願を擧げて段々に之を證明なされてある　先づ第一に第拾八願を擧げて、佛願力に緣るが故に、一念の立所に三界輪轉の事を免る事が出來る、是れ速かなることを得る一の證である。次には第拾一の願を擧げて、佛願力に緣るが故に滅度に至る事が出來る、是れ速かなることを得る二の證である。次には第貳拾貳の願をお擧げなされて、佛願力に緣るが故に、常倫に超出し普賢の德を修習する事が出來る、是れ速かなることを得る三の證であると、言つてお出になるのであります。

全體眞宗は此の三願の證で成立つて居るのである。先づ第一に第拾八願で信を得、第拾壹願で速に淨土に生れさせて頂き、第貳拾貳の願で再び人世に歸りて衆生化益をさせ頂くのである、即ち眞宗の敎行信證の信は　第拾八願から來り、證は第拾壹願から來り、還相廻向は第貳拾貳の願から出來て居るのであります

其處で何故速かに我々佛として頂く身分に定まるかといふに、斯くの如く本願力のお力があるからである、本願のお惠によるが故である。氣の附いた一念にこのお惠みが電光石火の如く至つて下さるからであります。至るといふと時間的に考へらるゝかも知れぬが、さうではない、氣の附いた時は既に惠みの中に居るのである。此間の味は殆んど人間の言語を以て言ふ事も出來ぬのである。和讃に、

罪障功德の躰となる、　こほりとみつのごとくにて、

こほりおほきにみつおほし、さはりおほきに德おほし。

この本願の親心が聞えて下される瞬間に、既に今迄の罪障の氷は解けて功德の水と化して居るのであります。

猶ほも少し聖人が速の字を喜ばれた場合を申しますと、『愚禿鈔』の中には、

本願一乘は頓極頓速圓融圓滿の敎なれば、絕對不二の敎、一實眞如の道なりと知る應し　專中の專なり頓中の頓なり、眞中の眞なり、圓中の圓なり、一乘一實は大誓願海なり。

聖人は本願の一道は實に頓速頓極、絕對不二の敎と常に喜んで、お出なされたのである。猶ほも一つ言ふと、矢張り『愚禿鈔』の中に圓頓の二字を解して

圓頓とは、圓は圓融圓滿に名く、頓は頓極頓達に名く。との文もある。

偖て聖人が斯く速の字を喜ばれた所以のものは、御自身の深き御實驗が源である、我々が唯徒らに口筆を飾つて言ふのと違つて、聖人の心中に、其初め願力に出遇ひて速に多年の苦惱を離れ、速に如來の大悲に滿足なされ、速に淸淨土にお入りなされた其の御經驗が活きて居たからである。私は斯く頂いて一入難有く此文字を喜ばせて頂いた次第であります。

夫から又『歎異鈔』の中では

たゞ自力をすてゝいそぎ淨土のさとりをひらきなば云云

此の外『歎異鈔』にはまだ澤山に「いそぎ」といふ言葉が出てあるのである。

淨土の慈悲といふは念佛していそぎ佛になりて、大慈大悲心をもておもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。

云云

念佛まふしさふらへとも踴躍歡喜のこゝろをろそかにさふらふこと、またいそぎ淨土へまいり度きこゝろのさふらはぬは云云。

また淨土へいそぎまいりたきこゝろのなくて、いさゝか所勞のこともあれば云云。

いそぎまいりたきこゝろなきものをことにあはれみたまふなり。云云

尙ほ此の外にもあるのです。斯の如く聖人は何處迄もいそぎといふ文字を繰反してお出になるのである　尙ほ又聖人は『選擇集』にお寄りなされて、『正信偈』の中には、

生死輪轉の家に還り來ることは、　決するに疑惜を以て所止と爲し、
速に寂靜無爲の樂に入ることは、　必ず信心を以て能入と爲といへり。

と矢張り速の字を用ゐてお出になるのであります。

扨て以上は速の字を用ゐられた御文を數へたのてありますが、聖人が此文字を用ゐられたに就きて殊に有り難く思ふのは、聖人が法然上人にお遇ひなされて、速に迷の命を終りて本願をお頂きなされ、又此世の命終りて速に淨土に往生なされた有樣であります。先きにも言ふたが、聖人には「本願を信受するは前念命終なり。即得往生は後念即生なり」と仰せられた、本願成就の文に佛は如何に仰せられてあるか。

あらゆる衆生其名號を聞きて、信心歡喜し乃至一念せん。至心に回向し給へり。彼の國に生れんと願ずれば、すみやかに往生を得て不退轉に住す。唯五逆と誹謗正法とを除く。

彼の國に生れんと願ずれば、すみやかに往生を得て、不退轉に住するのである。即ち彌陀本願の親心を聞かせて貰つた即刻に、往生の資格が定まつて、不退轉の位に生れるのとの御本願である。而して今此本願を其儘に頂く故、其瞬間に流轉の命が終つて、速に往生の位に入るのである。是即ち前念命終、後念即生であります。

設へば囚人が監獄中に於て、親の慈悲に氣が就いて「あゝ有り難い、親は此私の爲めに心配してゝ下されたか」と、氣か附いた時は、身は獄中に在りながらも心は既に親と隔が無くなつて居るのである。其如く我々も、身は人生に在りながらも、一念本願の親心に氣附かかせて頂いた後は、

超世の悲願きゝしより、　我等は前死の凡夫かは、
有漏の穢心はかはらねど、　心は淨土にすみあそぶ。

て、肉體は人間の姿ながらも、心は佛の淨土、佛の家庭に通ひつゝあるのである。而して其囚人が監獄を出れば、出ると直ぐ申譯がないといふ一念から早速親の許に驅けつける。その如く我々も今迄長々背いて居たが、夫程親は思ふて居て下されたのかと、喜んで歸へつて行く事が出來るのであります。其の歸る有樣は如何にも速かである。平生の時速に親の惠みを頂かせて貰つて居れば　又速に親の國へ歸らせて頂けるのである。けれどもまだ親の本願に氣附かぬ間は、監獄に居て少しも安心てない、親と自分とが心の中て全く別々になつて居る。いくら親でも自分のやうな者は寄せ付けぬてあらう、此儘では面目なくて親の家へは行けぬ」と、此方から親に隔てゝかゝる。「親は待つて居るかも知れぬが、何うも此て行つ

ては申譯が無い」と思うて居る。實は親の心を受けぬのであります。そして夫等の人達はいつも「監獄を出たら改心して」と思うて居る、監獄を出る時改心が出來る程の者なら、初めから監獄へは來ぬのであります。處が一念親の慈悲に氣が附いた者には、氣が附いた時が即ち改心の時である。今迄は監獄を出たら改心して、名譽も回復しやう抔と思つて居つたが、大間違い。自分は迚も改心などの出來る者で無いが、其者を親は昔から待て居て下されたのであるか、有り難い」と氣が附いて見ると、面目が無いとか、着物が汚ないとか、そんな事考へて居る餘裕もない。出ると直ぐ親の家へ歸へるのである一念親の惠みの解つかた者なら、出るとすぐ親の許に歸へれるのであります。

改心してから歸らうと思て居るのは所謂臨終正念の人である。そういう人が、若し惠みに氣が就かぬさ先に死んだら夫こそ實に大變である。又そういう人にとりては、佛の來迎といふ事も甚だ大事なのであります、佛の來迎は眞實惠みを喜ぶ者には必要がない、眞實喜んで居る者なら、來迎迄もなく、其儘直ぐ自分から飛んで行く。處がまだ惠みが解かつて居無いと親から迎ひをよこして貰つて、やつと引張られて歸つても、道々甚だ心配勝ちなのである。そうして直ぐには親の家へもよう行かずして、先づ親類位へ行き、其上で親の敎を承はつてやつと家に歸るのである。所謂化土の往生といふは之であります。佛は何も好んで化土をお作りなされたのではない。が佛の御まごゝろを疑ふ者は眞實淨土に行く事が出來ぬから、先づ其者を化土に導いて、其上て眞實に淨土に連れて來ようといふ特別の大悲方便である。親鸞聖人は

來迎は諸行往生にあり、眞實信心の行人は攝取不捨の故に正定聚に住す。この故に臨終まつことなし、來迎たのむことなし。

と仰せられてあるのです。眞實、惠みが頂けた者なら來迎は待たぬ、そんな手間暇の懸る話でなく、命終つた瞬間に眼を開けばもふ淨土に來ているのである。其の間に何等の隔も無いのであります。又臨終正念で、改心してから家へ歸るといふのなら、此方の改心の程度、修行の程度で、淨土にも色々の區別が出來て來る。所謂九品の區別が出來て來るのであります。けれども絕對の如來の惠みの前には、如何に修行の出來た者でも、學者でも、昔錦を着て故郷へ歸つた者でも、自分に「我はえらい」といふ心のある間は、まだ親の惠みが解つて居ないのである。けれども「自分には何んにも無い、今迄有ると思うて居たのは大それた横着であつた。皆親の御惠みであつた」と、親の足下にひれ伏した時には、親の誠心は誰彼れの差別なく皆一樣に照らして下されたのであつたのである。四海に身の措き所なき惡人でも、如何に久遠却來の惡人でも一念親の惠みに氣が就けば、設へぼろを着こもを着て居ても、唯有り難いと頂く外は無いのであります。玆になると本願一乘海の前には、四海の富も富ならず、五逆の惡も惡ならず、九品の區別は皆消えて仕舞ふのである。親鸞聖人は宣はく

大願淸淨の報土には品位階次を云はず、一念須更の頃に速かに疾し無上正眞道を超證す。故に横超と曰ふ也

と。即ち命終れば速に入る淸淨土」の味はひであります。

聖德太子の夢の告の御文は其外「敎行信證」の何處にても響くのである。先きにも言ふが如くで、『愚禿鈔』の金剛心の行人は彌勒菩薩に同じ云々の文に照らすときは、「善信善信眞菩薩」の菩薩は彌勒菩薩の菩薩と全く同意味になる。而して聖人は又此眞菩薩といふ意味と同じ意味に於て眞の佛弟子といふ文字をお用ゐなされたのである。夫れは即ち一番初めに申上た「眞の佛弟子と言ふは、眞の言は僞に對し、假に對する也、弟子とは釋迦諸佛の弟子、金剛心の行人也云々」の文が之であります。即ち眞といふは何か、僞の反對である、假の反對である。然らば其假とは何か。僞といふは何か。聖人は又「信卷」に於て、

假と言ふは即ち是れ聖道の諸機淨土の定散の機也。
僞と言ふは則ち六十二見九十五種の邪道是れ也。

と明かに示されてあるのであります。即ち聖人の御意では自分で善を修して佛に近づかうとする聖道門の人や、又種々の外敎に心を動かして居る人達は、眞の佛弟子ではない。夫等の人はまだ佛の眞實心を頂いて居ない人達である。玆になると佛敎八萬四千の敎法も皆駄目、唯如來の御惠み一つが眞實の敎である、如來の御惠を喜ぶ者丈けが眞の佛弟子である、といふ事になるのであります。猶ほも一歩進んで言ふ時は、本來此の佛陀絕對の御惠、如來の本願を衆生に傳へるのが、佛敎の眞精神、釋尊と世に出興せられた本意であつたのである。も一つ極端に言へば、彌陀の本願一つが一代佛敎の中心、一代佛敎の眼目、餘は凡て此本願を表はす爲めの方便の說法である、眞實の敎といふは唯此の大悲本願の外には無いといふ事になるのであります。

其處で此唯眞實の敎——彌陀の本願を顯はす爲めにお書き下された著作が、聖人の『敎行信證』であります。も一つ言へは佛陀の眞實、佛陀の「御まこと」を書いた書物が「敎行信證」である。即ち先づ敎卷に於ては佛陀の本願を說いた經が佛敎眞實の敎である事をお示し下された。次に其本願の南無阿彌陀佛の一行こそ佛敎眞實の行であることを說かれたのが行である。次に其本願のまことを信ぜよと敎へ給ひたのが信である。而して其御まことの御力で生れさせて頂く彌陀の淨土が、眞實證であることを御示して下されたのが證であります。殊に化身土卷の如きては、日月星宿をはじめ天地間の森羅萬象は、凡て此の如來の眞實、本願の一道を顯はす爲であると迄、御說き下されてあるのです。斯く如く佛の御まことの上より與つた敎が眞宗である。

偖し我々は斯の如き廣大なる本願に遇はせて貰ひ、今度は眞の佛弟子として如來の大悲を喜ばせて頂く事、世に是程有り難き仕合せは無いのであります。所謂佛弟子は澤山に居られるけれども、斯くの如く承はつて見れば眞の佛弟子とは、本願を喜ばせて頂く我々の身の上であつた。實に何とも言へぬ。唯喜びの極と言ふより外はないのである。聖人の仰せに、

故聖人のおほせには、親鸞は弟子一人もゝたずとこそおほせられ候ひつれ。その故は如來の敎法を十方衆生にときゝかしむるときは、たゞ如來の御代官をまうしつるばかりな

り。さらに親鸞めつらしき法をもひろめす、如來の教法をわれも信じ、ひとにもをしへきかしむるばかりなり、そのほかはなにをおしへて弟子といはんぞとおほせられつるなり、さればとも同行なるべきものなり。これによりて聖人は御同朋御同行とこそかしづきておほせられけり云云《御文》

「親鸞は弟子一人も持たぬ、其故は如來の教法を信じて、念佛を喜んで居る者なら、阿彌陀佛釋迦佛の弟子ではないか。夫れを我が弟子などといふは、實に勿体ない事である。」とは何たる有り難き御言葉であらう。眞の佛弟子といふ聖人の喜びは、明らかに茲にも鬱いて居るのであります。斯く聖人の思想は縱横無碍、何處に何う顯はれているかも解からぬ　聖人の御文は我々うつかりは讀めぬと思ひます。偖て斯くの如く如來本願の御まことを喜ばせて貰ふ者なら、眞も眞も是程の眞の佛弟子は無いのである。和讃に

釋迦如來かくれまし〳〵て、　二千餘年になりたまふ、
正像の二時はをはりにき、　如來の遺弟悲泣せよ。

若し釋尊と同時に生れたなら、直接御教化を受けて大に喜ぶ事ならんが、今我々は釋尊におくるゝこと二千年、如來の遺弟たるもの須く悲泣せよ、との御誡てある。けれども我々は不思議にも末世に生れて、而も末世相應の要法、法滅百歳の後迄遺して下さるといふ佛陀本願の御眞實を聽く事を得たのである。此れ既に不可思議の事實であります。而して此の眞實を聽かせて頂いた我々は眞の佛弟子である。又眞の菩薩である　聖人が善導大師の二河の譬喩につきて『愚禿鈔』にお記しなされてある御文に、

又西岸上に人有つて喚て言はく、汝一心正念にして直に來れ、我能く護らんと言ふは、西岸上に人有つて喚て言ふとは、阿陀彌如來の誓願なり。汝の言は行者なり。斯れ則ち必定の菩薩と名く。龍樹大士十住毘婆沙論に曰く、即時入必定となり。曇鸞菩薩の論には、人正定之數と曰へり。善導和尚は希有人なり、最勝人なり、妙好人なり、上上人なり眞の佛弟子と曰へり。云云。

實に勿体ない話てあるが、如來の御呼聲けに預つた汝は、是れ希有人てある、最勝人てある、妙好人てある、眞の佛弟子てある。必定の菩薩てある。等覺の彌勒菩薩と同じてあると、明に聖人はお示し下されてあるのてあります。斯く頂きて見ると、世に我々程仕合はせの者は無い。是れぞ實に眞の廣大なる惠みてあります。

而して、我々を如來の御まこと、本願を頂いた一念に、斯くの如き仕合せの身分として下さる。之につきて又經文の中には種々に仰せ下されてあるのであります。『教行信證』には今の「眞の佛弟子」の御文の後に、直ぐ之をお擧けなされてある。曰く、

大本に曰はく、設ひ我れ佛を得んに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、我が光明を蒙て其身に觸るゝ者、身心柔軟にして人天に超過せん、若し爾らずば正覺を取らじと。

一度び本願に氣がつきて如來の光明に觸れた者なら　不思議のお力て身も心も柔らかにして下さる。即ち人天を超過した菩薩の仕合を賜はるのてある。

設ひ我れ佛を得んに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、我が名字を聞て、菩薩の無生法忍、諸の深總持を得ずば、正覺を取らじと。

本願を喜ぶ者には菩薩の無生法忍を授け給ふのてある。之は現に彼の韋提希夫人が、獄中にありて釋尊の說法をうけ玉はり、心に歡喜を得られたと同時に、無生法忍を得てお出になるのてあります。

無量壽如來會に言はく、若し我れ成佛せんに、周偏十方無量無邊不可思議無壽界の衆生の輩、佛の威光を蒙て照觸せらるゝ者、身心安樂にして人天に超過せん、若し爾らずば菩提を取らじと。

又法を聞いて能く忘れず、見て敬ひ得て大に慶はゞ、則ち我が善き親友なりと言へり。

此の彌陀本願の惠みを聞いて喜ぶ者は、是れ我が親友ぢやと、恐多くも釋尊が言つてゝ下さるのてある。

又言はく、其れ至心有つて、安樂國に生れんと願ずる者は、智慧明達にして功德殊勝あることを得べしと。又廣大勝解者と言まへり。又是の如き等の類、大威德の者は、能く廣大の異門に生すと言まへり。又言はく、若し念佛する者は當に知るべし、此の人は是れ人中の分陀利華なりと。即ち本願のまことを頂く者は、同時に智慧明達にして頂き大威德を授かるのてある。又廣大勝解者ぢや、人中の分陀利華ぢやと迄佛は呼んて下さるのてあります。又『觀經』の畢に釋尊は如何に仰せ下されてあるかと言へば、

若し念佛する者は、當に知るべし、此人は是れ人中の分陀利華なり、觀世菩薩、大勢至菩薩其勝友となり給ふ。

とある。即ち甚だ勿体ない言ひ方てあるが、我々佛本願の親心を頂く時は、觀音勢至の二菩薩を自分の親友にもつ事になるのてあります。是ぞ眞に眞の佛弟子である。斯くの如く聖人は他迄念佛行者の德益を何處迄も絶叫してお出下さるのてあります。

處て聖人は彌々其極に達して何と仰せられてあるかといふに——

茲が最も大事てあります。

誠に知んぬ、悲い哉愚禿鸞、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の數に入ることを喜はず、眞證の證に近く事を快まず、耻つべし　傷む可し。

と、痛切に懺悔なされてあるのてある。茲は實に大事の處てあります。我々は信の一念に斯の如き德益を頂くからとて得意になつては相濟まぬのてある。聖人は「此の親鸞は、斯くの如き身分に爲て頂きながら、日夜人生の愛欲名利に心を奪はれて、少しも極樂に生れさせて頂く事を喜ばぬ。眞の佛弟子に爲て頂いたからとて、此方に一點頼む所があるのではない。佛の御力が貴いのてある　夫程の御恩にあづかりながら、少しも喜ぶ心の無いのは、如何にも淺間しき親鸞てあるとお歎きなされたのてあります。

偖て已上は聖德太子の夢の御告げをもととして、聊か聖人の御言葉、聖人の信仰を辿らせて頂いたのてあります、或は私一人丈の考に止まるかも知れませぬ。此の夢の御告げは先程も申すが如く、河内磯長轉法輪寺に在りとして『高田の正統傳』に出ているてあります　もとより確かな事は申されま

せぬ。去りながら、聖人一代の御教化より伺ふと、私はどうも確からしく思ふのであります。お互に幸にも此不思議の本願に遇ひ、共に一佛の惠を喜ばせて頂く事、是實に無上の光榮と存じます。殊に聖人の出世におくるゝ事七百年、而も今日其儘て惠みを頂く事の出來るは、我々如何なる宿世の佛緣による事か。之も佛陀が眞の佛弟子として御哀れみ下された御恩と思へば感謝の涙に咽ぶ次第であります。

しばしこそ世の冬枯にならふとも
したもえそめよ法の道芝。
世のなかはしばしばかりの乘合の
舟つくまでのすさびなりけり。
長き夜の旅ねをさますくだかけは
にしに心をかけろとぞなく。
事もあらて今年も秋になりひさご
なり下りたる身ぞ安げなる。
きえやすきかげともしらでもとの露
すゑの雫にやどる月かな。
御名をのみきくの下露いつのまに
深きさとりの淵となりけん。
たちかへる道まどふらん霜さゆる
枯野の原にきつねなくなり。

《行誡上人》

本誓重願空しからす

林　英　三

南無阿彌陀佛、皆さん喜んで下さい、私は何と云ふ仕合せ者でせう。此の度深い々々御緣で先生に會はして戴いて、誠に結構な身の上にさして戴きました。それで先生は私の今日獲信の次第を話して見よとの仰で御座いますが、あまり嬉しくて、あれもこれも一所に湧いて參りまして、迚も筋道が立たぬ樣な始末で、實は申上げるも畏多い事と存しますが、これも皆如來樣の御勅命と思へば、何憚る所がありませう、廻らぬ筆は疾くに彼方も御承知、殊に他の所ならば兎に角、此の水入らずの御仲間の座で、私如き者の思ふ所をたゞ有りの儘に打ち明けて、皆さんの御相談に預るは誠に有り難い仕合せで御座います。私はこう申して居ります中にも、現在如來樣の有り難い御惠みの雨が降り通しの樣に感じられます、南無阿彌陀佛。

先づ何から申さして戴きませうやら、私のこれまでの道筋は悉く御慈悲の御導きで御座いますので、マ御大切な御紙白とも辨へず、長たらしく述べさして戴きまするが、極近い今々の御手廻はしは、「下」の分だけに含まれて居ります。

上

私は美濃の者で、家は眞宗の門徒で、御座います。私の兩親は餘程御緣の深い方で、財產を元の倍以上に築き上げたと云ふ、隨分其れは辛苦もしたものでありまするが、又運もよくてする事なす事大抵圖に當つて參つたので、御座います。そして、親達は常々之を「我が力てはない、全く神佛の御蔭だ」と申しまするものですから、私共はモー極幼少の時分から、自力では何も出來ぬ、と云ふ事を割つて碎いて、聞かされ、殊に母親は私が末子でありますので、大層可愛がつて呉れまして、其育て方が一々「そんな事やると天理に叶はぬ、天罰を蒙る」又「天道人を殺さず、我が身は惡きいたづら者とあやまりはてよ」、それから「嚙まば嚙め喰はば喰へ、金剛心には齒は立つまいに」とか、或は「神佛の前は必ず禮拜して通れ、觀音樣は御緣を求めて八丁後をついて御出でになるから疎かには過ぎるな」と、モー物覺えの付いてからは、始終口癖に聞かされて、育てられましたので、私は子供心に、まだ四つ五つの頃から、冬時分は隣の婆さん達が、集まつて居る巨燵の櫓の上に乘つて、聖人一流の御文書を戴いては、御說敎を眞似した事も御座いました。其時分から朝、顏を洗ひますと、東門に立ち、先づ東に向ひ、西に直り、それから北南上下と向き廻つて、只今では其稱へました文句はよく覺えて居りませぬが、大体「東に在す皇帝陛下、西に在す西別院樣、四方八方の神社佛閣、天に在す日月星辰、地に在す神々、山川草木動植鑛物森羅萬象、宇宙あらゆる神々云々」と何時作つたともなく、また何の意味とてもなく、唯口からそれだけを定まつて稱へ、何度となくぐるぐる廻つて、禮拜し、誰かの足音でも聞こえますると、パット止めて內へ入いる。それですから、少しでも外へ出まする樣な時には、必ず御內佛を拜んで、それから道々目に見ゆる限り、又あの見當にあると思へば、森を隔てた向ふの神社寺院辻堂墓地、一つ一つ、幾度となく禮拜して通ります。そうせなければ何だか氣が濟みませんでした。最も夜分も床へ就く前には、必ず御內佛に御禮を申し、また折々は讀經も致しましたが、母親はそれを一番嬉しがつて呉れました。私はこう云ふ工合で、小學から中學の時代を通して參りましたので、中學へは一里半餘も通學致しましたものですから、其の往き還りに禮拜した數は隨分夥しう御座いますが、折々はモこんな何もならぬ事をして、生氣を使つて病氣にでもなりはせんかと、思ふ事もありましたけれど、何だか止めるわけにはいきませんでした。それから試驗等は、自分の力て何うしてもやつて來たとは思はれません、何時も案外な不思議の結果ばかりでした。私が此の師範へ入いりましたのも、到底我が力て決して入いれたとは思はれません、實に案外の事でした。聞くと、兩親は當時私の爲めに命懸けの神信心して呉れてあつたそうで、又私自身が矢張り國に居た時と同樣、道沿ひの社寺は一々、たとひ貼紙だらけの御稻荷さんても、默つて通つた事は御座いませんでしたので、私は其の御蔭だらうと思ひました。か樣に日頃神佛に願かけて居た事を、自分と自分でえらく鼻にかけて、何をやること一から十まで、自分の得の立つ樣に神佛を引込みますから、至極それは調法に行つて居ります。何しろそれて、頓と自分から物事に眞面目に勉强して見ようと、云ふ氣が起りませ

ん。なに自分はごまかして通つても、一言神に頼みさへすれば、惡うはして下さらぬと、またそれが實際此の時代は、氣に心配の一つもない、順境に立つてゐたので御座います。それで一口に申せば、私は幼年から師範の入學當座まで、殆ど二十年間、理が非でも一切神頼みで、たとへば猿が往きには「頼むよ觀音」歸りには「尻喰へ觀音」と云ふ調子で、暮して來たので御座います。

中

然るに滿つれば虧ける世の習ひて、私が師範の初年の夏に至りまして、最愛の母は病氣で遂に果てました。その臨終の二晝夜は苦しい中から涙の溢れきつた眼で、末子の私計りを見詰めにして呉れました。その葬式の翌晩、私は氣味の惡い夢を見ました。手拭を被ふつた母の姿が顯はれまして、「若し御前が其のまゝ學校を續けて行くと、廿五(今は廿四です)の三月廿五日に死んで了ふ」、と告げられました。其の後しばらくして、私の家の世繼きの兄も續いて亡くなりました。其の斷末間は、彼の去つた後の私の家の事を案じて、容易ならぬ苦しみをしたそうで御座います。

此の打ち重なる家庭の災難があつてから、私の自分獨り勝手な神頼みの心が、妙とかからり變つて、モーそれ以來神や佛があるものか、そんな体もないものが何處にある、よくもこれまで馬鹿を見て來たものだ、とサー宮の前で御座らうが、寺の門先で御座らうが、平氣の平左で通り扱け、あれ程に可愛がつて呉れた母の事も、あれ位に家を思ふて呉れた兄の事も、一向思ひ出さうともせない、また後に殘された老父義姉をも何う慰めやうとも考へない、ナニ世は獨立獨歩だ、正道踏むで進むに何か障害あらむ、國の爲めには家をも棄て、職の爲めには父母をも忘るゝ事ありといふ、風の筆法で、每休暇に歸省はしたものの、本當に氣休めの言葉一つ出さず、却て明け暮れ念佛三昧に入れる二人を見ては、彼等表を法に裝ひて、閑を貪る僞善者よ、虚僞者よ、とさげしみ、苟も人間たるもの正當の職に携はり、自ら大に爲すなくして何かせむ、意味なき死人の供養何の益あらむ、自ら体を固め技を磨きて立つべきなり。と、或る時は、私の實姉が死人の功德のため經文の御布施を上げむとするを、それより、牛肉でも其の金で買つて體の養ひに足し、君の爲めに御奉公するが餘程功德だ、と却けました事もあり、世は畢竟生存競爭、拳骨の突張り合ひ、勝てばこそ官軍なりだ、逆卷く激浪何か辭せん、嚙み付いて碎けるも男兒の面目なり、いて何程の難關も御座んなれ、と素張らしい帷幕で、單身奮鬪生活に乘り込みました、爾來好むで倫理道德修養本の類、立志英雄の傳記物等を讀むで見ました。此頃先生の學校の御講義にも、研究的に自己修養の一方便として、聽きに出て居りました。けれどもしかし、前申した母の夢告が、此間とて始終脱けませぬ、如何なる仕事を始めましても、何時も其の夢告が附き纏つて、些細なつまらぬ事にても苦になつて、堪まりません。また家の事にも滿更氣が懸からぬでも御座いませぬが、其のかゝり樣が、こんな風で二十五に死んでは、己れの家は何うなる、義姉が財を持つて去る、そんな事をされて先祖にも濟まぬ、是は体をう

んと丈夫に拵へなくては、第一勉强が何の役に立つ、それを案じて母がそれを夢で告げたのである、なに命あつての物種だ、先づ氣を晴らし体を緊め直すが第一番、と、それからはもーあらゆる運動の方面に手を出しまして、なかなか活動もして見ました。成る程そうすれば、体だけは相當に利く樣になります、けれども肝心の心の惱みは少しも解けません。或る時は此の小ざかしき迷信の奴、我が大事をなすの妨げと、出出すは殊勝なり、これも奮鬪場裡の腕試めし、いざ來いやつ付けろ、と踏張つて見ても、小僧中々しぶとくねばるので、果ては此方が根氣負けして、無暗にやけ酒や肉をやる、寄席や芝居に一時の鬱さ晴らしと洒落ても見る、と云ふ風になり、又或る時はこんな風に氣負けするは、まだ自分の頭腦の軟弱粗雜な爲めなりと、頻に禪學心理學哲學等をやりかけ、數學や理學で緻密な基礎を固めむ、と試みた事もある、それも凡べて駄目であつた。年は次第に移つて來るので、自分はもーこんな事をあさましく云ふて居る時節ではない、血氣壯んな勉强盛り、と時々は奮發心も起れど、何分內心深く横はる病根の夢は拔けない。のみならず年々と病勢を增しに增して、色々な忘念が混ざり込むで、制し切れない、氣はそく〳〵と落付きもなく、末遠き望とては一つもなく、たゞ一時其の場ふさぎの仕事に氣を紛らかす位ひ。で表面は色々の運動に手を附けて、至極快活な豪傑風を氣取つて、「運動せない奴は、よぼーだ、共に談ずるに足らない」、等高呼ばはりはして居るものの、其の御當人の心內の苦悶は一刻も息まん、希代に小さき事迄が氣にかゝり、烏が啼いたり葬禮が通つたりする時は、もー穴へでも入いりたくなる。坊主と見ると、鬼か蛇の樣に思はれ、遂には御互の人々まで、面と向つて見るのが恐しくて堪まらぬ、何でもない話一つが正氣で自由に出て來ない、こんな事では仕方がないぞ、と、表だけ氣を張つて鼻唄や酒で空騷ぎして見るものの、心は本當に小さく縮むで了つた。こんな時に誰一人でも、優しい言葉を呉れたり、同情して近寄つて呉れるものがあれば、心底から有難くて直ぐ縋つて行きたくなる。私は何うかしてこう云ふ友達を得て、共に精神的に交り、其生氣を受けて再び奮鬪場裡に打つて出たいもの、と去年の夏以來一人の友達を得ました。元より多くの運動部に飛入つた私、知合ひも相應に持つて居ましたが、それはたゞ知ると云ふに止まつて居たのです。けれど、今度の一人には、私は頭から何もかも滅多無性にこれに便り、一切凡べての事これを中心として割出す樣になつて來まして、初めの程は其の元氣で活潑なる所を受けて、自分も大に勇氣と奮鬪心も起つて來ましたが、元來先方も私の表に出た快活な所だけを見て交つて呉れたのですから、たまには「君何か苦しい事があれば小說や藤村の詩集でも讀むで見給へ」と慰めても呉れるけれど、そんな簡單な事で解けぬ。私の心の煩ひ、何うも本當にそれがよく吸み取れぬか、時に何だか氣薄い樣な仕振も見えて來る。そうなれば自分が折角これ程までに頼むで居るのに、と不平も出て來る。しかし何うしても思ひ切るに至れない。思ふてそれて互の爲め何の役にも立たんてないか、と知りつゝ、尙其思ひが止まぬ。つまりは是も以前の苦悶と同樣で、自分一人で拵えて思ひ、一人で作つて不

平云ふて居るので、其を其の友達に打ち明けて、何う慰めて貰ふとの氣もなく、唯一人で思ふ切り、こんな次第で私は折角其の苦衷を慰め樣と求めた友達で、却て二重の苦しみに陷りました。それでこんな病氣になつてゐては如何な奮鬪生活が面白くても、無益の苦勞は御免である、しばらくは其友達と遠さかつて、せめて一方の苦だけでも脱れむ、と獨り思ひ切つて、級の者に別れ、一月以來御茶の水の寄宿に移りました。しかし大病根の夢の勞力は愈增長し、末は限りあり、望みはなし、賴みもなし。もー奮鬪する勇氣も出ず、家を何うしよう、との考も起きず、毎日茫然うわの空で歩き、折々は電車にぶつつかつて見ようかとも思ふた位ひて、こんなに苦しみますのは誰かに呪はれて居るのでないか、と人を恨むて見た事もありました。そして矢張りかの友達を思ふ事は少しも變らず、而かももー其人に面と向き合ふが恐しくて、元より自分の苦衷を洩らすの勇氣はなく、其の意氣地なさ加減我れながら不思議て堪まりませんてした。それでも或る日曜の事天氣が好く氣が頗る進むだので、今日こそ久々に言葉輕々語り合ひ、其の後の經過も述べて、僅かばかりも自分の病氣を慰めて貰ふかと、共々散歩に出ました。所が何ぞ計らん、彼は自分の今度の處置を甚だ不滿に取り、其の散歩は全く默々裡に終り、其の別るゝの時私の病的な小さき頭上に手嚴しき最後の大鐵槌を喰らはした。私は其に對し彼の大なる誤解を翌日正さうと約しました。此の時私は非常に正道を踏むて居ると思ひ、先方の誤解のみしか見えませんでした。其の當日共に再會した。自分は彼の誤解の一々を事分けて辨じやう、と心では思へど、何うして口へ出すの勇氣が御座いませう。此の時彼は早くも天て聞く耳持たぬ、ときつぱり云ひ切つて去つたのです。

事こゝに至つては、最早や進むにも退くにも人世一つの當所もない、苦悶の極度に達しましたので、此の時代三年間は要するに單身力むて怒濤の中に飛ひ込み、種々樣々の理想や人世觀に捕まつて見て、皆悉くかきさらはれて揚句の果てに、奈落の水底に沈み切つたのて御座います。

下

たゞ何でもない迷信と、笑はゞ笑ひ得る常識外の沙汰なる夢の告にせがまれて、あがきにあがいた末に、唯苦しみながらも絶つてゐた、一つの人網も根元から切られ、眞暗闇の谷底に投げ込まれたは二月十七日、此の苦しい果敢ない迚も人は當てにならぬ、そして自分の及ばぬ力てこんな暗闇に何うする事か、金も智慧もあつたものか、ともー頭も無茶苦茶、氣も亂々て、本當に苦悶の頂上に至つたのです。

こゝに不思議な御緣になつて居ります事は、私が一月御茶の水の寄宿へ移りまして、同じ机に並むだのが、御僧家の方て御座いましたので、私は又々何の氣もなく其れから先生の御講義に出席して居りました。丁度其の日其の友達と最後に別れて、一時間と待たず、誠に不思議な御緣て御座いますが、先生は御講義に御出て下さつたので、早速拜聽に出ましたが、何うも頭が混亂してゐて何の事か分りませんでした。けれども、もー是非がない、何うなるとまゝよ、此の苦しみを一つ先

生に打ち明けて見よう、と其の御歸りに御伴を願ひまして、御宿まて道中色々と御聽かせに預り、私は先づ「頭が滅茶苦茶て何も出來ませんが、何か宜い方便は御座いませんか」と御尋ねしますると、「まことに氣の毒な事、それと口から云ひ切るまてには、容易てなかつたてせう、何うか如來樣の御本願を御聽きなさい、私の「懺悔錄」を讀みましたか」、「ハイ讀みました、其の苦しい有樣は同じて御座いますけれど、苦しむ原因が全て違ひます、もー私はこれから何うせ苦しむなら、先生の樣にぐつと修養して、佛典佛書を研究して、苦しむても見たいものてすけれど、今ては、もー何を讀みましても直ぐ忘れて了ひます。第一根氣がさら續きません。實申しますとまだ御法の聽き方が足りません」、と申せば、「そんな自分て修養してとか、理屈道理を究めてとか、そんな事が一つも役に立つものか、其れが出來る位なら撰擇の他力本願は御座いません、」と仰せになりました。そして私は「上」の段、神佛禮拜の時代をあらまし述べますると、「そりや貴方は御緣が深いので御座います、しかしそれて信心が戴けて居るとは、申されませぬ」と仰せになり、私は最後の御別れに、こんな事はと思ひましたけれど、其の一番苦しい夢の告を御話し致しますると、先生は其の御部屋へ御呼び下さつて、次の御狀を御手筆て書いて御渡し下さいました。

若我成佛、十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺、彼佛今現在成佛、當知本誓重願不虛、衆生稱念必得往生。

右法然聖人親鸞聖人へ附ケ文。

我三尊化塵沙界、日域大乘相應地、諦聽々々我教令、汝命根應十餘歳、命終速入淸淨土、善信々々眞菩薩。

右磯長太子親鸞聖人へ告命文。

又其處に原さんも來合はして御出てになり、極樂の夢の話も御聞かせに預りましたが、何しろまだ悶々の焰か鎭まりませんので、何の事やら一向分りません。それから寄宿へ歸りまして、熟々考へまするに、世の中にはまだあの樣な情深い御親切な方々がある、何うしてあんな風になれたものだらう、何ても尋常づくてはない。それにしても自分はあの尊い御部屋へ導かれて、何故もつと有難味が起らなかつたのか、又何か當り前の樣に思ふて祿々禮もせなかつたのは何故か、と氣付きますると、自分が前の友達に對する處置が自分一人了見てやつて、矢張りそうてあつたわい、との思ひが出て來る。更に懺悔錄を讀むて見ますると、阿闍世王の懺悔かぶん成る程そうてあるなー、自分が善い々々と思ふて居たが、皆惡かつのかなー、これては何ても我を折つて、佛道に入り込み、此の罪を先生方に聽き分けて戴くより外に道はないわい、と眞實命懸けで取りかゝりました。それて其の翌日塚本さんの處へも參つて、長々と御話を聞かして戴きましたが、何ても先づ、我か身は惡いいたづら者、と懺悔して、自我を無くして如來樣を御賴み申す事だわい、と合點して、もー自分を忘れる爲め何もかも振り棄てゝ、殆ど休まずに一週間たゞ御稱名を稱へ續けて送りました。これから先生の日曜講話を聞く度毎に、考へ方が色々違つて居ります。次の週には、如來樣は何時も附き纏つてゐて下さると合點して、有り難い事だ

わい、もう餘の人は誰も要らぬ、こう云ふ事なら、まだ何だか物足らぬ感じがするから、鎌倉へでも引込むで此の有り難い如來樣の事計り思ふて、もつと親味になつて見たいものだ、と、もー試驗前でも勉强も何もしたくなくて、御稱名を稱へて送りました。次の週には、佛樣があれもこれも我等の爲めに造つて下さつたのである、と合點して、道々見るもの聞くもの、一々について、私の爲めにか有難いわい、と御稱名を稱へて通りました。此の時は前の「上」の段の樣に、自分に都合のよいものにはそう思へますけれど、自分の氣に合はぬ事には、存外うまくうなづけません。そんな時火の樣になつて嘆異鈔を繰返しても駄目でした。次の週には、佛樣は尊い結構な方だ、と合點して、自分はこう云ふよい方(理想)へ氣が附いたのだ。もー外の者共はつまらぬ小さな事に何知らず吸々して居るが、御念佛にまさる功德はないに、と、もー自分で捕まへた氣になつて、それでもまだ何うも浮いて居るから、理屈で一つ重みをかけて置かう、と出かけますると、何だか宗敎が安ぽく、信を一つ持つて立つと、人格養成に都合が宜い位に書いてあるので、また元の苦悶にはまりかける。いやこりや自分がそんな輕く考へたから頭が痛くなつて來たのだ。何に餘念はない、たゞ有難い有難いとうなづくさりだ、と唯もー御稱名を稱へ詰めにして、人事にとては何も手が附きませんでした。此の間二十日餘は短い日數で御座いますけれど、一寸の間も佛樣を自分で放すまい放すまいと揉搔くので、其の苦しさは何も知らなかつた時よりも尙ほ烈しい位でして、もーこれも止めてなるまゝに棄てゝ了ふか、と思ふても見ましたが、それでも止めて何と取附く所もない自分だ、何か此の際ほがつと不思議な物でも見えはせぬか、と、一途にあせつて必死と御稱名を稱へ稱へて日送りいたしました。

斯樣なわけで、三月七日となりました。此の日那珂博士の御葬式で、青山墓地まで御送りしまして、其歸り、つと乘りましたのが九段行の電車でしたので、初めて第二求道會の土曜講話の事を思ひ付き、早速其足で參つて、御講話を聽きました。別に何時もと變つた御話でも御座いませんでしたが、それから歸りまして相變らず御稱名を稱へて居りますると、ふつと己れは如來樣の光に包まれて居るは、如來樣は今附いてみえるつと感じました。私の獲信の瀨戸はこゝて御座います。すると急に何だか心がさらさらつと變つた樣になつて參つてもー嬉しくつて嬉しくつて胸が躍ります。廊下を通るにもシコロを踏むで驅けます、夜分寢ましても光に包まれ切つて居る樣に感せられて、床の上で兩手を肩にシガミ付けて、くるくる躍つて居ります。何處を見ても、誰の頭にも現に御慈悲の雨がぱろ〳〵降つて見えまするので、走り寄つて其れを話してやりたくなり、もゝ心が賑かで、賑かで堪まらずに、一人で笑て御稱名を稱へて居りました。丁度之が試驗の數日前でしたが、それからは勉强も進むでやれる樣になつて參りました。先週の日曜に御講話の後で「こんな有り難い事は全く夢の樣に思はれますが、此の嬉しさがなくなりはいたしませんか」、と申上げますると「一旦そう捕へた以上は、其感じは脫けぬから、冷える事があつても氣落ちせなくても宜い」と仰せられました。それから毎日もー御慈悲の雨が何處に何うしてゐても、降りづめの樣に見えまして、私こうして居りますると、あたり皆佛樣に取卷かれて居る心地がいたしまして、もー自分のする事は皆佛樣が御一所に行つて下さるので、私が今日迄通つて來ました「上」「中」の段、それから自分獨り揉搔いて佛を作つて居た間の、苦しみも、悲しみも、不平も、慢心も、ころむだのも、はねたのも、一つとして此の御慈悲に取附かして戴く爲めに、如來樣からの御手廻はしになつて居ないものは御座いません。自分一人で起つたり居たりしたと、思ふて居りましたが、皆これ如來樣の御差圖で、させられて居りましたので、これまで私が會つたもの、取つたもの、一つとして、私一人の爲めに、御本願の御力になつてゐないものは御座いません。もうよく思うて見ますると、此の世だけ位て御座いません、幾萬年のその間、色々と手を換へ品を換へて、たゞ私一人今日此の御慈悲に氣附かせるが爲めの御苦勞で御座いましたので、たゞもー嬉しいと申上げる計りで、此の嬉しみが御分ち出來るなら、もー自分は何うなつても構いません。昨晩から今朝へかけて、殊に私は以前の所行に對し、父にも濟まなかつた、義姉にも、實姉にも、友達にも、誰にも、濟まなかつた。何故あの樣な惡心を持つてゐたのであろう、との思ひが、胸一杯に差詰まつて、濟まなかつた濟まなかつた、の涙が、心の胴底からむく〳〵つと押し出て、止め切れません。今朝此處へ參ります前、日本橋まで用事て行きましたが、其の歸り小一里の間、本當に泣き續けて參りました。これと一所に何うして今日マーこんな心にならせて戴けたか、そうさせて戴いたのもあれあの如來樣の御本願からてあつたのか、と、此の罪は皆如來樣にまる任せてあるのか、と、其の悲しい涙と、嬉しい涙とが、一度に出て來まして、たゞ不思議不思議と御稱名を稱へて參りました。私は今迄眞暗闇にして暮きました家へ歸つて、父にも義姉にも十分懺悔して、共々に此の廣大な御慈悲の光て、出來るだけ明るくさせて戴く爲めに、今晩の夜行て歸國いたします。もー如來樣御先頭に、三世の諸佛、母も兄も諸共、賑はしい旅立をいたします。もー何處て何んな憂い目に會ふとも、嚙まば嚙め喰はば喰へ、此の身は皆如來樣にまる任せて御座います。南無阿彌陀佛。

くどくは御座いませうが、私は何と云ふ仕合せ者てせう。此の疑ひ深い、性根の座らぬ、憶病な、愚痴だらけのごまかし男と、生ませて戴いて、只今こゝて眞物にさしかへて、精の續く限り御恩返しに、あたはつた職を御本願の力て、働かさして戴くのて御座います。どうか皆さんも早やく御慈悲に、氣附かして戴きなさる樣、少々の力の智慧や才の力て、何うなるものても御座いません、現在煩悶や、病氣や、災難て、色々と苦しむて居らるしやる御方は、それだけ御緣が餘計深い御仕合せなのて、皆如來樣の御本願から、苦まして戴いて居らつしやるのて、自分一人苦しむて居るのに、と愚痴を起しなされては、勿體ないわけで御座います。どうか命を的に詰まる所まて苦しまさして戴きなさい。如來樣は人を殺しはなされませぬ、私が若し「上」の段の樣に、自分勝手な神頼みて滿足に進むだり「中」の段の樣に、獨立獨行て調子よく行けましたら、なかなか今日の身にはさせて戴けませんので、私が何てもなさそうな母の夢て、あれ程苦しまさして戴いた其

の母は、如來樣の御手廻はして、此の世計りの母ではなく、死むで迄も始終附き纏つてゐて呉れましたので、イヤな烏を啼かしたり、友達を附けたり放したり、谷底へ落して先生に救はせてまた自力であがかして見たり、させて下さつた所の其の超世の御苦勞を、只今思ひますると、谷底に落ちた苦しみ等、苦しみと申せた次第で御座いません。私は初め苦悶の最中夜分寐られない樣な時、朝は、すつかり氣抜けして居りましたが、昨晩などは嬉しくつて殆ど寐られなかつたけれども、今日は此の通り心いさむで話さして戴きます。又自分で力むで嘆異鈔を繰讀みしました時と、今心嬉しく拾讀まして戴く時と、其の味ひが、がらり違ひます。先生の御講話でも、中村君、原さん等の告白でも、以前首を伸び出して其の事柄に合點いたしました折と、只今其心持を知らして戴くのとは、其の有難味がすらり變つて、先生の御言葉一つが只今では、直き〳〵如來樣が頭上から、英三英三と御喚びかけ下さる樣に屆きます。たゞもーそれで、如來樣の光明に包まれて居るんだわいと、自分で合點するのと、包まれて居るつと信じさして戴くのと、ほんの僅かの違ひて、私の心の据え所はすつかり變つて、たゞ此の上は命終速入淸淨土、と信しさせて戴いて、御念佛申さして戴く計り御座います。南無阿彌陀佛。

附

道中賑はしう無事宅へ歸りまして、其夜は三人輪にて廣大なる御慈悲の御話をさせて戴き、翌日は彼岸の終日て御座いましたから、御寺へ朝座に父と參りますると、住職が無量壽經の上卷とかを柏子打つて讀まれますのが、もう其の六つかしい意味は分りませんが、唯何となう心から有難くて泣けて來て、遂に居堪まらず、其足で村の小學校の卒業式に出ました所が、例の君が代は千代に八千代を謳ふた後で、校長が敎育の勅語を讀まれますると、其の一句一句が骨身に撤して、また涙がわく〳〵つと胸一杯になつて來て、もー私は狂氣の樣になつて、校長の訓話が濟むと思はず生徒の前に出て行つて、「私はこれまで何度も御勅語を聞きましたが、今の今迄其の味ひを知りませなんだ、代々の天子樣の御恩の深い事も、其の御諭しの御言葉の心も、初めて本當に分りました、どうか皆さん此の兄顏をして居つた英三が、こゝてこぼした涙を今日の褒美だと思ふて、これ程味ひのある御勅語を疎かにして下さるなよ」、と、最後に御奉答の歌を謳ふて、退いた樣な次第で御座いますが、これと申すも大悲大願の親樣の御恩から氣付かして戴いたので御座います。私は何うしても此の敎をくつと幼少な時分から、健全に植え付けねばならぬと思ひます。私はたしかに幼少の頃、何とはなしに頭へ浸み込まして戴いたものが、一番力强い御導きになつて居ります。私の里では佛法は隨分繁盛いたして居りまするが、何うも兎角間違へられて、私の「上」の段の方へ向き易い。さなくば棺桶へ片足入れた御年寄の仕事と、なつて居るのが、多いので御座います。今度の私を何か氣が上つたものの樣に、兎に角驚きを立てゝ呉れまして、一週間の逗留も、子供や年寄り勢て毎晩違ふまて大賑はして御座いました。そして其の三晩目の明け方で御座います、かの三年前に夫に先立たれて、淋しう御暮しの義姉は不思議な夢に出逢はれました。只今其の話された通りを

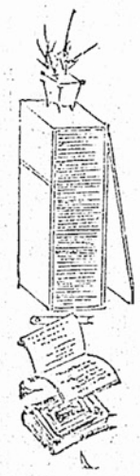
綴つて、皆さんのお土産にさして戴きます。

「私は且那と大岸(田甫の名)へ小麥蒔きに行きました(中略此の處その且那と母と顯はれて義姉との間に二三の話し合ひあれど省きます)私は雨が降りそうになりましたから、歸る支度して(モー此の時は一人)、荷物一式持つてあぜ道を越えますとさいが、いよいよ雨が降り出しました。それは一通りの降りて御座いません。そうやつて隣の田甫のあぜまて來ますとさいが、何うして轉がらかしましたんか、私は荷なつて居つた桶を轉がらかしました。そうするとさいが、其の桶の中へ大車軸の雨が直ぐと一杯溜りました。そんて私はしばらくの間に此のまー雨はなー、と肝をつぶしながら、其の桶の水を南向ひて、明けようとして居りますとさいが、誰も呼びそうに御座いませなんだが、聲がしまして「悲しい事がなけらにや喜べん」と云ひましたので、ふいつと仰いて西南の空を見ますとさいが、雲の合はいさから、此の雨にずく濕れになつとる私に、ちかつと光明がさしました。あれつと思はず御稱名を稱へますと、其のいきに裏の家の戸が明いた音て目が醒めました。私はこの朝に限つて朝寐しましたが、醒めてからもつとあの夢が見えたらなー、と、惜しいやら其光明を見て嬉しいやら、私は元から夢と云ふもんは、切れ切れにか、そうじやないと朝になつて忘れて了ひますが、これぱかりは今てもかつきり其田甫から其有樣が、あり〳〵見えますので、何の氣なしに南の空を向きましても、其光明がさしとる樣て、不思議じや有難いと思つて、御稱名を稱へて居ります云々」と。

私はたゞもーそれて、御本願の力の不思議な事、成る程悲しい事かあればあるだけ、本當に夜晝變らぬ御慈悲の光を喜べとの、親樣の御方便が屆いたので、御禮報謝の御念佛が何よりて御座いますよ、」と申したわけて御座います。

ふりかへつて見まする、此の御廣大な御本願を我が物顏に力むて振り廻はして、誠に悪じ入る次第て御座いまするが、どうか皆さん此の嬉し紛れにどた〳〵申した事柄を讀まないて、たゞ御互に一度ても餘計御法を心から聽かして戴いて、此の計り知れぬ廣大な御本願を、共々味はして戴きたいぱかりて御座います。南無阿彌陀佛。

尙ほ皆さん、私は小石川大塚高等師範の第一寄宿に居りますから、殊に現在何かお苦しみのお方とは、喜んて御近うさせて戴き度う存じます。卯月八日淸書、



講義

歎異鈔

第八章

近角常觀

念佛は行者のために非行非善なり、わがはからひにて行ずるにあらざれば非行といふ、わがはからひにてつくる善にもあらざれば非善といふ、ひとへに他力にして自力をはなれたるゆへに、行者のためには非行非善なりと云々。

前の章に於ける無碍の一道を反面より言ひ顯はして念佛は、行者自力の行に非ず、善に非ずと示して、如來絶對の大善大行たることを闡明せられたものてある、すべて『歎異鈔』は言語が何時も明瞭直截てあるが、其代りには含蓄の味が少い、しかるに聖人直々の筆に成りたるものは言語が頗る朦朧とした風があるが自然に意味深長てある、『末燈鈔』終の御消息の後半が全く此章と同意てある、曰く、

實號經にのたまはく、彌陀の本願は行にあらず、善にあらず、たゞ佛名をたもつなり、名號はこれ善なり行なり、行といふは善をするについていふことばなり、本願はもとより佛の御約束とこゝろえぬるには、善にあらず、行にあらざるなり、かゝるがゆへに他力とはまふすなり、本願の名號は能生する因なり、能生の因といふはすなはちこれ父なり、大悲の光明はこれ所生の縁なり、所生の縁といふはすなはちこれ母なり、

彌陀の本願は行にあらず、善にあらずとは何を意味するか、先づ文字の意義を明らかにせねばならぬ、非行非善の行といふは、行者が自力にて作るところの善、自力にて行ずるところの行といふことてある、故に『歎異鈔』にては行者の爲にはといふてある、而して末燈鈔には「本願は」と云ひ、歎異鈔には「念佛は」と云ふてある、是れ一見何んとなく意味異るが如き感を生じ安い、されど是が全然一致たる點を味はねばならぬ、抑〻法然上人の撰擇本願念佛といふことを明らかに了解せねばならぬ、普通の考にては撰擇本願中に誓ふてある念佛といふことゝ解し安い、此時は撰擇本願の念佛といふ所謂依主釋になる、そうてはない、撰擇本願即ち念佛といふ持業釋に見ねばならぬ、何んとなれば吾人が度々述ぶるが如く佛が持戒禪定乃至孝養父母等を擇びすてゝ念佛のみを選びとりて、之を以て十方衆生を攝せんと本願を起したまひたるのてある、佛の撰擇本願の成立が即ち念佛の成立てある、故に本願といふも、同一てある、聖人が法然上人の敎を單に撰擇本願とのみ宣ふも同一てある、其本願とは佛の約束てある、念佛とは佛の撰擇したまひし法てある、下の十一章にある如く「たもちやすく、となへやすき名號を案じいだしたまひて、この名字をとなへんものをむかへんとの御約束」てある、かく佛の約束が本願、佛の案じ出したまひたが念佛、畢竟同一物にして、其物は全く行者自力のはからひによりて作りたる善にあらず、行にあらず、唯佛が佛名をたもてと約束したまひたる本願、其約束通り佛名をたもつが念佛てある、故に念佛するは佛願に順ふのみにして我等の企てたる善にあらず、又行にあらず、そこて『歎異鈔』には「わがはからひにて行するにあらざれば非行といふ、わがはからひにてつくる善にもあらざれば非善といふ」といふたものてある、即ち行者自力のはからひの善ても行てもないといふことてある。末燈鈔には「本願はもとより佛の御約束とこころえぬるには善にあらず、行にあらざるなり」といふたも同じ意てある、若し之を正面より言へば如來本願のはからひたる他力の大善大行の念佛てある、詳しく云へば佛が不可思議兆載永劫に修行して積功累德したまひたる結果てある、そこて末燈鈔に「名號はこれ善なり、行なり、行といふは善をするについていふことばなり」といひ又「かるがゆへに他力とはまふすなり」といひ、歎異鈔には「ひとへに他力にして自力をはなれたるがゆへに行者のためには非行非善なり」といふのてある、かく選擇本願即ち念佛をば行といひ、善といひ得るが、其行は即ち佛の大行大善てある、選擇本願即ち大行即ち「たゞ佛名をたもつ」のてある、行卷に大行とは無碍光如來の名を稱する也とあると同意てある、又言南無者の釋に發願回向といふは如來既に發願して、衆生に行を廻施したまふの心なり、即是其行といふは選擇本願是なりといふたは全く此意てある、之を要するに如來選擇の本願、即ち念佛は、行者自力の行にあらず、善にあらず、他力の大行大善なりといふ意てある。

さて何が故に念佛は行者の爲に非行非善なりなど云ふ妙に角だちたる御敎化は來りたるかといふことを言明せねばならぬ、そは畢竟念佛を行者の爲め行なり善なりと誤解したるものが多かつたからてある、抑〻法然上人の御弟子の多數は皆選擇本願念佛といふことを佛の本願に行者が念佛を修行する功德によりて救ふとあるから、我等は其念佛を行せねばならぬ、念佛は行者の爲の行なり、善なりと考へた、かく念佛に力を入れつゝある間に選擇本願の文字は空虛になつた、そこて行者の爲に非行非善なりの警告が來らねばならぬ、全體信仰問題の經過は下の譬喩の如き有樣がある、たとへば秋の菓實中の最美味を定めて曰く、栗こそ最第一也とて之を示す、直に栗を了解するものには是にて十分てある、されど若し誤解して栗とは彼「いがくり」のことなりと思へるものあらば如何、必ず再び示して曰く栗は「いがくり」に非ず、と云ひて之を去りて其中の栗顆を示さねばならぬ、若し是にて直に栗を了解すればよきも、若し誤解して栗とは彼褐色の殼也と思はゞ如何、必ず三たび示して曰く栗は褐色の外殼に非ずといひて、之を去りて其中の栗實を示さねばならぬ、今法然上人が選擇本願念佛と宣へるを見て、其念佛とは行者の行也善也と誤解するものあらんか、是非とも念佛は行者の爲には非行非善也と宣言して、是れ佛の行なり、善なりと示さねばならぬ、若し再び誤りて念佛は如來の法躰也我等之によりて如來に歸らんと云ふときは三たび念佛は如來の法躰に非ず、如來の本願なり、如來の約束なり、之を信するは本願に順するなり、之を行するは約束に從ふなりと言はねばならぬ、是姑らく一例を以て信仰問題の變遷を示したのてある、法然上人が念佛と云ひ、親鸞聖人が信心といひ蓮如上人が後生たすけたまへと、各同じ

ことなれど言語の異なるは此の如き譯である。

今我等如來の本願を信じて念佛するは全く如來本願の御はからひである、即ち大悲の光明の御催によりて、此本願の御慈悲が心に達したるときが、即ち名號が我等が心に宿りたのである、光明は如來悲母の慈懷である、名號は如來慈父の御名である、大悲御催の惠によりて、大慈の御呼聲の御名が心に達したるときが信樂開發の一念である、行卷に光明名號の父母の因緣によりて信心の業識を生ずといふは實に聖人內心に實驗したまひし信心獲得の有樣である、こは和語燈錄に法然上人が說きたまひしことなれど、親鸞聖人に至りて慈父悲母の因緣にたとへて、如何にも大慈大悲の願心が屆きた有樣を示したまひてある、而して其信心開發の一念に忽ち口に其念佛が出で、又其光明に攝取さるゝのである、即ち父母が我を生むのみならず、亦我を育して下さる如く、又光明名號の父母は外緣となりて亦信心の內因を育てゝ下さるのである、かくの如く、一代の聞回向の信心の內因が　光明攝取と念佛相續の外緣に育てられて報土の眞身の果を得るのである、此の如く『行卷』に二重の因緣を以て全く如來回向の『敎行信證』即ち念佛成佛の眞味を示された、是眞宗の骨髓である、此點は聖人が餘程力を用ゐられたものと見えて、阪東報恩寺の御眞本に此兩重因緣の文章に澤山に朱を施したまひて自ら玩索措くあたはざる御樣子が伺はれる、『末燈鈔』には此を手短に示された又執持鈔には叮嚀に示されてある。

かくの如く本願即ち念佛が心に宿りたるときが即ち信心の業識である　夫が口にあらはれたときが念佛である、『信卷』には其信心の上につきて非行非善をいふてある、曰く、

凡ソ按スレハ大信海ヲ者不レ簡ニ貴賤緇素ヲ不レ謂ニ男女老少ヲ不レ問ニ造罪ノ多少ヲ不レ論ニ修行ノ久近ヲ非レ行非レ善非レ頓非レ漸非レ定非レ散非ニ正觀ニ非ニ邪觀ニ非ニ有念ニ非ニ無念ニ非ニ尋常ニ非ニ臨終ニ非ニ多念ニ非ニ一念ニ唯是レ不可思議不可稱不可說ノ信樂也、喩ヘ如下阿伽陀藥ノ能ク滅スルカ一切ノ毒ヲ如來誓願ノ藥ハ能ク滅ニ智愚ノ毒ヲ一也。

前章に引用せる行卷の一乘海の釋と同意てある、即ち一乘海の無碍の一道が心に宿りたるが即ち大信海の業識てある、而して『歎異鈔』は其信心より流れ出づる念佛につきて非行非善をいふてある、而して『末燈鈔』は選擇本願念佛の上て非行非善をいふてある。そして此三は全く同一物の如來他力の大行大善てある。

第九章

念佛まうしさらふへとも、踊躍歡喜のこゝろをろそかにさらふこと、またいそぎ淨土へまいりたきこゝろのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにてさふらふやらんと、まうしいれてさふらひしかは、親鸞もこの不審ありつるに、唯圓坊おなじこゝろにてありけり。よく〳〵案じみれは天におどり地におどるほどに、よろこぶべきことをよろこばぬにて、いよ〳〵往生は一定とおもひたまふべきなり、よろこぶべきこゝろをおさへてよろこばせざるは煩惱の所爲なり、しかるに佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願はかくのごときのわれらかためなりけりとしられて、いよ〳〵たのもしくおぼゆるなり。また淨土へいそぎまいりたきこゝろのなくて、いさゝか所勞のこともあれは、死なんずるやらんとこゝろぼそくおぼゆることも煩惱の所爲なり、久遠劫よりいまに流轉せる苦惱の娑婆はすてがたく、いまだむまれざる安養の淨土はこひしからずさふらふこと、まことによく〳〵煩惱の興盛にさふらふにこそ、なごりおしくおもへども娑婆の緣つきて、ちからなくしておはるときにかの土へはまいるべきなり、いそぎまいりたきこゝろなきものを、ことにあはれみたまふなり、これにつけてこそ、いよ〳〵大悲大願はたのもしく、往生は決定と存知さふらへ、踊躍歡喜のこゝろもあり、いそぎ淨土へまいりたくさふらはんには、煩惱のなきやらんとあやしくさふらひなましと云々。

此章はたとひ踊躍歡喜の心おろそかにしても、いそぎ淨土へまゐりたき心なくとも、皆是れ煩惱の所爲なれば、此等の熾盛なるにつけても煩惱具足の凡夫を助けたまふ大悲大願は眞に我身の爲なりと、往生一定の安心して毫も往生不定の疑念を雜ゆ可らずと、例の如く極端に示したまひた章てある、此章は歎異鈔ては頗る人の心にとまる所てある、されど動もすれば此章を讀み違ひして居る弊がある、此章をよみて、親鸞聖人てさへ、踊躍歡喜の心おろそかてある、いそぎ淨土へまゐりたき心起らぬと仰せらるゝゆへに、我等は喜べずとも可い、淨土を欣ばすとも可いと云ふ樣に理解して居る、成程いかにも親鸞も喜べぬ、又淨土を欣べぬと宣ひてあるも、夫て可いとの事を仰せらるゝのではない、喜べぬのてこそいよ〳〵大悲大願は難有い、往生は一定じやと益々決定心の强くなる金剛堅固の信念を披瀝しられたものてある、しかるに喜へずとも可いと云ふ意味に取るのは喜はねばならぬと思ふに喜べぬゆへ心持惡しく思ふて居る所へ、喜はずとも可いと許を與へられて心持がよくなつたといふ意味てある、此の如きは喜はぬものを益々憐みたまふ大悲大願を仰がぬのてある、此大悲大願を仰がずして、單に喜はずともよいと言ふのは不法懈怠てもよい、極端に言へば信心なくとも可いとても言ふやうな意味に取ることになる、大悲大願に氣がつきてみれば、喜べずとも可ゐ位のことてはなゐ、喜べねばこそます〳〵たしかに御助てある、なぜなれば喜べぬは煩惱、御助は煩惱熾盛のものとあれば我こそ御目當なりと、喜へぬ事程益々本願のたしかなことを決定するのてある、本願さへ仰げば喜べずとも可い位てなく、喜へぬのてこそとの堅固深信を生ずる次第てある、然るに若し此本願を仰がずして、喜べずとも可いと言ふことは信心なくとも可いと云ふも同樣てある、例へばたゞの御助けとか　無條件の救濟とか云ふ言語が陷る誤解と同樣てある、平素信ぜねはならぬ、稱へねばならぬと力味心を持つものゆへ、夫を拂ふために此言を用ゐたのてある、詳かに言へば信ぜねばならぬ、稱へねばならぬと云ふ信心稱名は畢竟自力の信行て　我等よりの參らせ心、參らせ物てある、其樣なものは不用なれば之を拂てたゞと言ひ、無條件と言ふたのてあろう、されど佛の大悲大願はたゞや無條件位てはない寧ろ罪惡深重煩惱熾盛のものを助けんとの慈悲てある、此本願をきかばたゞや無條件位のことてはない、我等がごとき罪惡のものをかく惠みたまふ佛の眞實佛の回向の不思義を仰がねばならぬ　そこて他力回向の信行は自然に賜はるのてある、たゞや無條件位てなく、佛より　御眞實と大功德とを頂くのてある、此章も同樣て抑々喜ばねばならぬと思ふは畢竟我等が自力て勉めて喜ばんとする心てある、夫を喜ばずともよいと拂ふて一應は心持はよいか喜へぬやうな煩惱熾盛のものをこそたすけたまふ大悲大願に安心して決定せずは金剛堅固の深信は得られぬ、喜へぬともよいと氣休すめをして居るのは、

たゞの御助け無條件の救濟といふことを誤解して、信心も念佛もいらぬといふとであると思ふやうなものである、たゞの文字や、無條件といふことばかり眼につきて御助けや救濟は少しも感ぜぬ、此章でも「唯圓坊同じ心にてありけり」といふ所だけよみて、よろこぶべきことをよろこばぬにて往生はいよ〳〵一定とおもひたまふべきなり」といふ所をよまぬ間違である。

抑々歎異鈔全体に向て此誤解がある樣である、即全部を貫く罪惡救濟を誤解して罪惡深重煩惱熾盛でも可い、少しも差支ないといふ意味と考へて居る、そこで罪惡を寛恕するものと非難する、尤次第のことである、全体眞宗の僧俗は本願といふ大音宣布に向て頗る感覺が鈍くなつて居る、歎異鈔の罪惡の文字を見て本願の文字を見ぬ、「罪惡深重煩惱熾盛の衆生を」といふ所を見て、「たすけんが爲の願にてまします」を目にとめぬ、「本願を信ぜんには」をよまずに、「他の善も要にあらず」といふ文字に、氣持を惡しくし、「惡をもおそるべからず」といふに絶驚して「彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへに」といふ大德音は少しも耳朶に觸れぬのである　古も今も『歎異鈔』の特色を認めず、却て遠慮勝なる態度を以て回護の身構をなすは殘念である、近時出版されたる妙音院了詳師の聞記に香月院師初め歎異鈔を氣持惡く思ふ身構を直言して笑殺したはよいが、反對に罪惡深重といふは行者內心の自覺の有樣にして、即ち機の深信である、愚痴の法然房十惡の法然房と仰せらるゝ如く、一切經を五遍熟讀したまひし聖人も內心自覺の上では一文不通である、一心金剛の戒師でも十惡の法然房である、たとひ罪惡深重煩惱熾盛とありても氣持惡しくするに及はぬと辨ぜられた、如何にも其通りである、されど了詳師の語氣によるに、機の深相の信信では罪惡深重でも、實際上罪惡深重でないのであるから安心してもよろしいと云ふ身構に見へる、一歩進めて、なぜ其樣に自覺のみにつきて罪惡救濟を言ふて、事實上につきて罪惡救濟を恐れるのか、機の深信は法然聖人ばかりではない、耳四郎でも同樣である、罪惡を自覺するは事實罪惡があるからである、法然聖人であらうが、耳四郎であろうが、佛陀に對しては事實上同じく罪惡の徒である、抑々事實罪惡の徒か救濟されねば歎異鈔の價値はない、世人は動もすれば監獄などで『歎異鈔』などよましむるは危險のやうに考ふるものがなきに非ざるも大なる誤である、監獄の如きは最も『歎異鈔』の力のあらはるゝ場所と考へて、而も私は數年來大に之を說きつゝある、然らば何れの點につきて世人の誤は存するかといふに、上に言ひし如く、罪惡の文子のみに注意して之を救濟する本願の文字を活きて讀まぬからである　香月院師あながちに之に氣附かぬにあらざるも、罪惡の深重なる事程ます〳〵本願の深重なる事を言ひ顯す力が鈍い、隨てもしや罪惡深重でもよいと云ふ誤を來たさんかとの老婆心を生じたのである　老婆心を生ずるは畢竟『歎異鈔』の特色の價値をそれだけ認める事が少かつたと言はねばならぬ、了詳師は一層進めて內心自覺の上より氣持惡しく感ずべきことでないとまでは申されしも　畢竟事實上實際の惡人のことでないとの回護の筆勢であつて、事實罪惡の深重なるだけ本願の深重なることを強く示された『歎異鈔』の價値

を認められたとは言へぬ、寧ろ世人の杞憂を氷解せしむるためには私は下の如く答へんとす、罪惡深重とあれば事實上耳四郎の如き徒皆是である、されど之を憐み助くる本願を信じたる上は、自己の罪惡を自覺する樣になるのである　機の深信は是である、既に自己の罪惡を自覺慚愧したるものなれば必しも危險はないのであると言はねばならぬ、されどかくの如き自覺を促し來る源は其罪惡深重を捨てざる如來深重の本願の事實に淵源することを忘れてはならぬ。此點より見れば此章は『歎異鈔』の特徵を最も著しく示されたものと言はねばならぬ。即ち第一章の罪惡深重煩惱熾盛を唯圓房及聖人の事實的問題として揭げ、而も之に對する本願不思義矜哀の事實を擧けて內心自覺の深信を示されたるものである「願力無窮にましませば罪業深重もおもからず」即ち吾人の罪惡の深重なるだけ夫れだけ本願力の無窮なることが顯現する次第である。

彌陀の佛日普く照耀す、已に能く無明の闇を破すと雖も、貪愛瞋嫉の雲霧、常に淸淨信心の天に覆へり、譬へば猶ほ日月星宿の、煙霞雲霧等に覆はると雖も、其雲霧の下明にして闇無きが如し、信知するに日月の光益に超たり。

《親鸞聖人》

慶嘆

十二　眞假佛土

上來敎行信證往還二種回向、即ち佛陀の惠が我心に到つた結果我々が佛陀の境に達せしめて頂き、その靈境より再び此人生にあらはれ來ることを述べたが、是等の種々の事實を眞いてある中心は、眞實の佛陀である。而して又その眞實の佛陀にまで導く爲の假の佛陀がある。この眞佛假佛の事に就てこれより云ふところあらん。

一言にして云へば、現今信仰界の有樣は種々の實驗より種々の佛敎を味ふが、其要點は凡ての人が此信仰の中心なる佛陀の考へようによりて其信仰も皆それ〳〵異つて行く。先つ昔て云へば我身は佛であると自身の上に佛陀と見認むるときは禪宗の如きになり、又その佛陀を理窟的に考へると哲學を基として立つる宗旨になり易い。其外或は佛を社會的に說かんとし、或は心中に理想的に考へるなど、いろ〳〵佛陀に就ての考へやう味ひやうによりて、其人〳〵の佛敎になりて仕舞ふ。今親鸞聖人は如何に佛陀を考へたかといふことが、親

鸞聖人の教行信證の中『眞佛上卷』に於て顯はしてある。

それはどうあらはしてあるかといふに、聖人は眞の佛陀は光明無量壽命無量の覺躰であると定められた。この無限の光明無限の壽命の佛陀には、或は時間的に縱に際限なく、空間的に横に邊際なき哲學的實在なりと解釋するものもあるが、たゞそれだけで慈悲の御佛といふことに氣附かされば、それは宗教の中心としての佛陀ではない。聖人の示し玉ふ佛陀は無限の慈悲と無限の智惠との塊りであるが、聖人はこれを理窟から考へたにあらず、自ら佛陀に遇ひ奉つて光明の攝取にあづかつたその事實ありのまゝの告白である。この佛陀の境は即ち彼の應身の釋尊が八十年の生涯を畢つて還歸せられた涅槃の境界である。この涅槃の境界をば委しく說いたが彼の『大般涅槃經』であつて、聖人は眞佛土の卷には皆これを引いて置かれる。親鸞聖人の意によれば一代の經文に說きたる澤山の如來は、皆光明無量壽命無量の佛陀である。即ち阿彌陀一佛であるといふのである。此味をは充分に味ひて充分に明らかに云ひあらはすときは、恐らくは佛教全躰の上に就ても總ての樣子が大に變ることゝ思はるゝ。今これを少しく歷史的に云へば、抑佛滅度以後の佛陀の教團が上座部大衆部と分れたが、この時に早や佛陀に就ての思想が大に差異を生して來た。上座部は佛陀を人間の側に見て、自分等と多分の差異は無いといふて居る。大衆部の方は佛陀は無限の壽命無限の光明であるといふて居る。上座部は律法的に陷り、大衆部は信仰的に有り難い佛陀を見認めたのである。下つて聖道門淨土門の二大潮流の上に就て見ても、この二種の傾向は著しくあつた。聖道門は其名の如く大聖釋尊の道であつて、之を辿つて佛果にまで達せんとするので、つまり佛陀と我等とは共通點の著しいものとして、釋迦何人ぞ我何人ぞといふのである。此の如き非常の意氣込を以て進み行いて果して最終目的にまで達し得べきかといふに、この道は實際上到底辿ることの出來ぬ道である。この聖道の教門の塞つて仕舞つた最後に、佛陀の方から我々に向つて開いて下さつたが淨土の一門であつて、この淨土門の信仰にあつては實驗的に光明無量壽命無量の廣大な佛陀の惠みを喜び名號を稱ふるのである。この眞實絕對の佛陀を初から喜ぶこと能はずして、却て我等の方から種々に佛陀を拵へて行くならば、それは方便化身の佛陀である。世人が信仰問題に就て頗る切實に考へて、中心から佛陀に向つてありつゝ猶佛陀を自己心中に畫き出して、

以てその佛陀と交らんとするものがある。これは想像の佛陀であつて、此の如き人を定善の人と名ける、又佛陀をば實行の標準と定めて、自己を修養してこの佛陀に近かんとするものがある。これは理想の佛陀であつて、此の如き人を散善の人と名ける。

『觀無量壽經』には定善の觀佛に對て十三の觀法を說いて、先つ此世界の太陽を觀想し、次に池水を觀想し、それより進んで極樂世界の阿彌陀佛、觀世音菩薩、大勢至菩薩等まで觀想して、此肉眼を以て明了に佛陀を拜し得るまでやつて行くの方法を示してある。その次にはこの冥想觀察を修し能はぬものゝ爲に、行者の智力の淺深意志の强弱に應して、九品の階級を作つて、それ〳〵の行法を示してある、これを散善九品といふ。彼の聖道門の種々の行法は、人間の千差萬別の心に應じ境遇に應じて、色々と佛陀の惠を說き示したのであつて之を約すれば觀經の定散二善の外に出づるものはない。其定善散善の行者の心に應じて示現するところの佛陀は、種々無量なりといへども、要するに假設假想の佛陀である。此の如き無量無數の假想の佛陀も、其本は唯一眞實の佛陀が、萬差の人心を救濟せんが爲に善巧方便を以て分身示現し玉へるところにして、南無阿彌陀佛以外のものは無い。其萬差の人の爲に暫く開いたる法門に滯り、假にあらはれたる佛身をたのみてあるならば、眞實絕對不動の安心に住するとは出來ぬ。故に親鸞聖人の和讃には

念佛成佛是眞宗
萬行諸善これ假門
權實眞假をわかずして
自然の淨土を得ぞしらぬ

と慨歎せられてある。

然らば眞に廣大なる佛陀を認めずに、衆生が自己の智分に隨つて、種々別々に種々無量の佛陀を眺めるは抑何から起るかといふに、廣大の佛智不思議の力を見認めずして、衆生自身が佛の如く行ひて佛の許に往かんと考へるが原因である。絕對無限不可思議の眞實境より、佛陀無限の慈悲を顯はして罪惡の凡夫を救濟して、光明壽命の靈界中に入らしめんとて、殊更らに成就し玉ふ自然の淨土極樂世界を根本的に疑ふて、そういふことはどうしてもあり得ぬと思ふて、自から佛の如く作さんとして行くから起り來れるのである。換言すれば佛智不思議の如來の大心をば、凡夫の小智をもつて隔て、絕對

無限の佛に對して却つて自己の思想から局分をつけて眺めて行くのである。眞實の佛陀はたゞ慈悲である。然るに其廣大の慈悲を疑ふて信ぜず、自力によりて行かんとして種々に佛を觀じ佛を行じするのであるから、絶對無限の慈悲を信する眞實の信仰に入ることを得ずして、却て定散二種の善根を策勵するに至る。かく云へはとて强ちに善本德本の名號を稱へ、諸善萬行を修するのを惡いといふのでは無いが、信仰の極處から云へは我能く善を行ふといふは誤りであるといふのである。絶對眞實の善は佛以外になしといふことの解らぬ間は、眞の信仰でないといふのである。此點は古來信仰問題にとつて尤も六かしいところで、大に注意を拂はねばならぬ點である。屢云ふ如く、我等は大聖道を辿りて佛果に至ることは到底出來ぬ。出來ぬことを爲さんとするから律法的になる。淨土門はたゞ行き易い位でない、唯有淨土一門で、他の方からはどうしても行かれぬのである。初から絶對一門である。その絶對一門が開け來りても、佛の惠計りで助かると頂けぬ限りは、佛をは向ふに置いて、之に縋りついて念佛する事になる。それでは設ひ一心に向つたところが、向ふたり念佛したりすることによりて助かるのであると自ら局り隔てゝ居る爲に、眞の佛の惠に過ふことが出來ぬ。世の中に善といふ善は佛以外には無い、自分は善を行ふことの出來ぬものである、唯眞實佛陀の惠でなければ何事もならぬといふところで、眞の佛陀の光を見、眞の信仰に入るのである。人生道を求めて佛に依らす、宗敎を信せすして、自分の善根に腰を据へて居る間は、信仰には入られぬ。種々に悶がいた最後に自分では到底行けぬ、佛に依るの外なしと一旦氣附いて來ても、其心持が佛によりて道德を進め、信仰によりて偉人にもならんと考へて居る間は、佛が見へても佛智不思議が見えぬ。唯善を行する方便として佛を觀し変るのである。理想の佛想像の佛である。絶對的に佛に依る眞の信仰でない。法然上人か唯南無阿彌陀佛あるのみと云はれたるを、その當時の人の中には念佛を唱へ修善して行かんとする考の起つたは抑何であるか。佛陀絶待の惠を見認めずして、佛を假想して佛によりて佛に近附かんとするので、佛を道具になして仕舞ふのであつて、本當の處に行けなかつたのである。これは千古萬古同し問題である。西山鎭西の人達がいふたからとて、これを七百餘年の昔日の譚としてはならぬ。現今にありても自分は倫理道德を實行してゆくそれか宗敎であるとか。宗敎によりて自己の行

を善くならしめんといふのは、皆宗敎を手段にして理想假想の佛陀によりて安心せんとして居るのであつて、つまり行くべきところまで行かすに半途に彷徨して居るのである。空しく眞佛に遠さかつて居るのである。だから、往生已後も極樂の邊地に生れる。乃で中心佛の惠が頂けて頭が下かつたのでないならは、どれ丈身を低くゝ持つても心底には漫心を捨てぬのである。一方には漫心を捨てす、一方には行くべきところまで行かす、懈怠に流れて居るから懈漫界に生れるのである。佛の惠を見認めずして、自分でどうしてかうしてと計つて、小さい城廓を構へて局分して居るから疑城に生るべく、眞實の佛心を見ざる故に、死後にも極樂の三寶を見聞すること能はざるの厄を受くる、之を胎生とも胎宮とも名ける。要するに眞に佛陀の惠が聞へたる信仰の人ならは、三界流轉の牢獄を出つることを得るが、若し眞實の惠が聞こえざるときは、直に親の家庭へ歸ること能はず、假令業繫の牢獄を出てゝも、尙半途に滯りて善くなつてから〳〵と善根の城中に立て籠りて、自力の作善に耽つて居る。是の如く絶對の惠の知れざる間は、各自の力次第で信仰に淺深がある。九品の階級が分れる。從て淨土の果報に於ても九品の差別を存するに至る。これ親鸞聖人が一代の間夫に愛ひたまへる點である。世人此佛の惠を知らずして、各自區々の所信を懷いて相爭ふに至る、淺間敷く歎はしきことである。眞に佛の惠に入らしめて凡夫も、聖者も、五逆のものも、謗法のものも、皆同一鹹味となりて、相見て慶樂する別天地を開かしめたいといふが、親鸞聖人の一生涯であつた。現今日本の社會も、一旦信仰の方面に心掛けて居りても、此佛智不思議といふ點が見えぬから、自分が宗敎道德によりて善くしようと考へて居るから、動けば動くほど皆結果は虛假に陷つて仕舞ふ。

是に於て注意すべきことは、聖人一代の間殊に說かれたところの三願眞假の法門である。法然上人は唯第十八願の一つ丈を揭けて、十方衆生唯南無阿彌陀佛の一つで助かるといふことを正面からキハドク說かれた。親鸞聖人は第十九願第二十願を指示して絶對の惠が分らずに自らの善根で助からんとする人をも終には眞の惠を知らしめて往生せしめんといふか第十九願の意である。又自分は善根も功德も及ばぬが、どうか佛陀の加被力によりて善くならんと、一心に念佛ばかり稱ふるものをも、終には佛の惠に入らしめんといふか、第二十の願の意であると云はれてある。法然上人の門下の中でも、

西の聖光坊は、諸善萬行を修するものも往生すべしと云ひ、西山の善慧上人は往生の道は固より念佛の一つである、念佛を稱ふるときはその力にて往生すべしと云ふた。現今の信仰問題の上でもこれらと同じ傾向がある。要するに如何に佛よ佛よと呼んで居ても眞の信仰でない故に、聖人は是の如きものをば方便假設の願に滿つたものであつて、佛智不思議を疑ふから小さい局分のところにしか生まれられぬ、假願假佛ではいかぬと嚴しく誡めて、必ず如來の本願でなければならぬと敎へられた。私は久しく親鸞聖人の說き振りをながめて、これは方便假門では行かぬぞと貶斥して、絕對を立てたのである。第十九願第二十願は諸善萬行自力念佛の人を打ち込む監獄の如きものであると考へて居つた、よく味ふて見ると全くそうでない、私共信仰の經驗から思ふて見るに、自分の力でなければ行けぬと考へた人ならば、其人自身の心にまかせたならば、永く佛の惠に氣附くことが出來ぬ。佛智不思議を疑ふ人間はいかぬと貶斥して仕舞はれたら、何時までも信仰には入られぬ。佛智を信せざるものに信ぜしむる道が開いてあつてこそ、如何なるものも終に救濟を頂くのである。子が隔てる故親も隔てるならば何時までも子供の善くなるためしなし。佛智不思議を我等の方から隔てゝ居るが、それを佛は聊かも隔てず疑はずして之を導いて佛智不思議に入らしめんとするか、第十九二十の方便の誓願を設け玉ふ所以である。よりて十九二十の誓願は自力疑心のものゝ入るところの監獄にあらずして、疑ふものゝ疑をはらさしめて、遂に救濟せんといふ慈悲の施設である。『歎異鈔』に

自らのはからひをさしはさみて、善惡の二つにつきて往生の助け障り二たやうに思ふは、誓願の不思議をばたのまずして我心に往生の業をはげみて、申すところの念佛をも自行になすなり、この人は名號の不思議をもまた信ぜざるなり、信ぜざれども邊地懈慢疑城胎宮にも往生して、果遂の願の故につゐに報土に生するは名號不思義の力なり、これすなはち誓願不思議のゆへなればたゞ一つなるべし。

又聖人の和讃に

定散自力の稱名は、
果遂の誓に歸してこそ、
おしえざれども自然に、
眞如の門に轉入する。

とある。廣大の本願の不可思議を信せずして、自ら計らひを以て名號を我物顏に稱ふる自力の念佛も、『不果遂者、不取正覺』の廣大なる願力によりて、遂に第十八願の絕對の惠に入るのである。斯の如く佛智不思議を信せざるものをも、遂に信ぜしむるが佛の威神功德不可思議力である。

世には見佛とか見神とか云ふて、佛陀の御姿を眼に見て信仰に入つたとかいふ事實のあるのは、それは眞實の佛陀を拜したのではない、佛陀の化身を見たのであつて、即ちそれが方便引入の一つである。佛身を見る計りでない、或は痼疾頓に愈へて信仰に入つたとか、其他種々無量の御催促から遂に眞實の信仰に入らしめて頂くのである。親鸞聖人は「定善は觀を示すの緣なり」「散善は行を顯はすの緣なり」と斷せられたは、このゆへである。要するに信仰は偶然に起るにあらず第十九、二十の誓願の力からいろ〳〵と計らはれて、遂に絕對の信仰に引き入れられるのである。親の惠を知ることが出來なかつたものが、遂に信ぜられるに至つたのは、一應ならず再應ならず幾度も〳〵親が念力を運んで下されたからである。然らば佛土に就て眞假の判を設け玉ひたは、單に眞假の箇別をするのでなしに、佛陀を疑ふものをも佛陀はいよ〳〵捨て玉はぬといふことを明らかにしたまひたのである、もう一つ云ふならば人生に於て惡事を爲したまでが、佛陀廣大の惠に入るの御緣になりて居る如く、佛智疑惑のものが遂に信仰に入るといふことを示すのが眞假佛土卷の要點である。

四恩瓜生會

去る明治三十二年創立せる同會は故瓜生岩子の遺志を紹ぎて慈善矯風の實を擧ぐるを目的とし今日までに種々の方面に於て社會に貢獻し來りしが今回始めて會堂を東京小石川區大塚坂下町なる所謂五十軒長屋に近き土地に建設して大塚會堂と名づけ日曜日毎に晝と夜とに分ちて少年と大人との爲めに講話會を同會堂に開く外猶此會堂を公衆の爲め諸種の便宜に供すること〳〵せり是慥に同會の一發展にして同會は更に進んで將來漸次諸方に此種の會堂を建設するの外猶此種の事業を行ひて大に其目的を達せんことを期せり而して本四月十九日午後一時より右大塚會堂に於て開堂式を兼れて春季大會を開き文學博士前田慧雲氏及棚橋絢子女史の演說、筑前琵琶劍舞落語等の餘興などありて廣く公衆の入場を歡迎すると云ふ會堂の所在地は音羽護國寺の北脇上り西に折れて巢鴨監獄署の正門に至る道路に沿ひ電車の江戸川終點より約十町流車の大塚停車町より約六町にして達すべしと因に同會は婦人を正會員とし男子は賛助會員とし會費一ヶ月五錢にて何人にても入會することを得事務所は小石川大塚辻町東京市養育院內に設けあり

嘆詠

春光

甲之

暗きに光
あかるく、あかるく
今はさながら
佛のみくに。

緑の檜桧、
日はま昼、
笹濁る水
池をめぐりて
音す水口。

白き梨花、
蜂の羽振、
しづけき春よ
命みつる園。

一日なりとも

左千夫

散る花のはかなき我れと嘆きけむ
聖人戀ひつゝ獨物思ふ

群肝の心の濁り思ひ悔ひ尊き人に
戀ひ渡るかも

あぢむらの騒きのゝしりかしまし
き世となりにけり古へ戀しも

目を擧て世の中見れは自らを謹む
人は稀れにたに見ぬ

我れがらにおのれをほこる騒ぎを
しよぎてあらなむ世には住むとも

學びなき鈍人我れや裏表の世に交
じはらむたづき知らずも

愚我が人憎くまむと嘆けとも悲し
き我れや我を去りかたし

少女等が白玉碗に清水汲む清き心
を一日なりとも

時報

春季傳道概況

前號所報の如き日割を以て去月廿五日、主筆近角が九州石見地方傳道の途に上りたるは、是亦前號記載の如くなるが、爾來今日に至りて一ヶ月余。而も其間佛陀冥々の加護を蒙り、身に一日の疲勞なく、家に一日の異變なく、到る處熱誠なる御同胞の心よりの優遇と同情を恭うし、都鄙各地に佛陀哀々の德音を讃仰せしめ、幾多の未見同慶の信友と相語り、幾多如來の愛子と相知るの機を得しめ給ひし事、實に吾人は遙かに其行程を想うて感謝に堪えざるなり。而して此間の傳道日誌是非本號に掲載の豫定の處、旅中の近角にありては殆んど日夜講演に、はた坐談に、寸暇なく、遂に本號編輯の機に間に合はざるに至りたるは深く讀者諸君の諒察を冀ふ所なり。據て茲に近角が傳道の餘暇各地より致したる片信を日時の次第に列記して、以て其の經過の大略を讀者諸君の想豫に任かせ奉る事と爲しぬ。素より隨所隨時に發したる短信に過ぎざれば、事の遺漏せるもの定めて多からむ、吾人は幸に次號に於て其日誌を精叙して其欠を補ふ所あらんとす。

御變りも無之候哉、今朝母上米原にて面會、母上も至極健全に候。時間余ありし爲め俄かに牧田氏（江州馬淵）に立寄、同氏母病床中にて（ギドク）説法致候、非常に喜ばれ申候。何事も御恩と喜入申候。《二十七日正午、神戸汽車中より》

昨日は馬車にて緑麥黄菜の中を過ぎ山を越え谷を下り、其心地よきこと限りなし、乘合の友は伊勢神道學校の卒業生と、他は田舍の人。宿につけば山崎氏の夫人の妹は、森川町の山本章一氏の夫人、一夜説法致候處、大に喜ばれ申候。山本氏が神道にてありしことより漸次御緣となりて、同行の青年亦大に御緣を喜び、何れも慈光喜をび申候。無理して早く出てたる事が、多くの人と法を喜ぶ御緣と相成り申候、《二十八日石見津和野町より》

今日横田にて講話いたし候。非常に人情質撲にて嬉敷く存候。此地に來りて善光寺に參詣せし昔を想ひ浮べ候《二十八日石見描田にて》

拜啓本日午後一時四十分益田町泉光寺木村春雷師宅へ到着仕候昨夜迄は景色はがきにて大略申入候通りに候。殊に此處の石見傳道は一擧一動佛意に叶ひ候樣にて、事々に忝く存候。本日は六時半醒め、七時迄瘧にあり、七時より盥嗽、七時半佛前にて例の如く正信偈六首引和讃大勢至讃、八時朝食、八時半より九時迄は町原氏母を主として僧侶に對し法話をなし、佛德を讃歎致し候。ついて横田小學校に赴き、十時より教育會の爲めに講話致し、本生談長壽王の話、山脊王聖德太子の話より十七憲法につきて話致候。十一時出立零時過高津栗栖家を訪ひ、其母を主として一族及同行者、及迎の人に對して本願力廻向を話致候。此高津は柿本人麿の誕生地にして、同神社あり、之に詣し申候。萬葉の昔を偲ひ申候。觀月亭より眺めたる白砂と松林の景實に長生萬壽の色を呈し申候。此濱に連理の松有之候由、夫より車にて益田町に到着候。木村氏一族の精神的の歡迎、實に空前の美はしき事に候。佛前に詣し座敷に通れば、床には大般若の守護神、釋尊文珠普賢を中心として、十大善神の幅有之申候、……夫より木村一族姻戚近傍法類同行等に對し、一大講話を致候。其主意は「信卷」初の『夫獲得信樂發起如來選擇願心、開闡眞心顯彰從大聖矜哀善巧』といふことに有之候ひし。最後に「行卷」一乘海の釋は太子勝鬘經

の御文なることと、「華嚴經」の『文珠法常爾法王唯一法』の文とを述べて佛恩を感謝致候。實に石見は思想濺海たるもの有之候。（中略）晩又法話、此度は實驗談にて、福間氏の事始終を話し申候。今後紀念の爲め佛前に阿彌陀經を讀む事に致候。今正に入藉せんとして文珠菩薩の福の下に此書を認めつゝある次第に候。以上是れ本日の寫生に候。隣室にて木村氏夫婦の方が本日の法緣を喜ばるゝ樣、實に稀有なる淸らかに麗はしき事に候。今夜は是迄に致候。南無阿彌陀佛。《二十九日午後十一時、石見益田町泉光寺にて》

拜啓　予も此度は、念佛につき、大に修し度き念を生じ申候。色々の御緣にて如來の御慈悲を深く〳〵味はせて貰ふこと、暮れ〳〵も難有奉存候。石見の人の眞摯なる大に驚き申候。本日益田より當地に來る、二里は車、他半里程佛にのり申候。勿体なく〳〵常念佛に候。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛《四月二日午後一時、石見土田にて》

明治四拾一年三月廿九日より四月二日迄此の淸淨地に傳道致候《同日、同所より、益田町新橋の繪葉書》

此圖は人丸神社山上の觀月亭より遠望したる景色也。イヨ々々本日濱田出立、船にて福岡に向ふ。《四月六日、濱田より》

九日間石州傳道を無事に終りて、九州に向ひ申候。人情質朴奇談あり《同上》

今四月七日午後十一時常觀兄無事御着。郵便物御渡申候。《四月七日、福岡、久保猪之吉氏より》

本日は此近傍の共進館にて演說した。少し過激にすぐる程熱心にやつた。石見を出たときの皆の情あつき事、實に斷腸の思がある程也。歸つてはなしする。段々歸京が近くなる。《四月八日、福岡より》

此處にて本日久保兄の御饗應にあづかり、演說をすまし、是より熊本に向ふ。《四月八日　福岡東公園より》

四月八日夕六時熊本に向ひ玉ふ。《同日久保氏より》

一昨日福岡出立後熊本に着候處、中尾老婆はじめ、靑年會及信者皆會合早速談話致候《四月九日、熊本より》

今朝馬車にて出立、阿蘇山脈を越え、深溪、大瀑、高峰、頗る奇觀に候。十三里を經て坂梨といふ處に宿せしに、佐藤源八といふ求道の讀者ありて、演說を乞はる。乃ち廣大の御緣を喜ぶ。同氏は嘗て入監したるが緣となりしといふ。本日此噴火口より五十町の處を過ぎ來り候。《四月九日夜認竹田町より》

こは廣瀨中佐の出たる處に候。こゝで一日丈け演說致候。《四月十日、竹田町より》

此別府にて面白く一日暮し演說致候。《四月十三日別府町より》

昨日は此宿屋にとまり申候。併し非常に多忙に候。溫泉は實に靈泉に候。《四月十三日、別府町不老泉より》

大分の女學校にて話致候。演說後に汐干に生徒が出かけ喜びおり候。《十四日大分町より》

毎日〳〵雜誌原稿書かんとするも、寸時もヒマナク困入候。今夜は書き度く存ずれど如何。致方無之候。トニカク右申上候。《四月二十三日豐前友枝より》

先生御來臨御傳道被下鄕民及私大に感謝に堪えず候。佛恩の深重なる御方便嬉敷も御座候。學舍御一同の御健康を祈り申候。《同日　安村曉雲君より》

尙ほ本日頃は近角事長崎市にて講演中の筈。歸京は來月八日頃の筈なれば早くは來月第二日曜日、遲くも第三日曜よりは求道講話開講の豫定なり。

◎重刊既成豫約募集◎

◎東洋哲學の最も組織的なるは本書の外に之れを求むるの地なし◎

東京帝國大學文科大學長　文學博士　井上哲次郎君
前東京高等師範學校教授　文學博士　蟹江義丸君　共編

日本倫理彙編

約六千頁再版既成

全部十卷
正價金拾四圓
古今未曾有の珍書
クロース上製紙箱入

◎世の文學者哲學者幷に精神界開拓者は須く本書を座右に具ふべし◎

◎本書は四拾餘家七十有餘種二百數十卷、皆これ各名家秘藏の珍什にして今日到底容易に手に入る可らざるものなり◎曾つて著者が時勢に鑑み滿腔の心血を注傾して本書の編纂に從事せられ本會より出版して幸に江湖の喝采を博したりしも部數限りありて普く世の篤學者の需用に應ずる能はざりしを來たしたるも市場沸底の爲め一部に廿五圓を支拂ふも尙求むるを得ざるは今日の形勢なり◎今や精神修養の進歩と共に需要激增

◎申込期限　第一期明治四十一年四月三十日限　第二期明治四十一年五月二十日限◎送本申込到着順四月廿日より

拾卷全部　第一期　一回拂　金七　圓　也　內地送料五拾二錢
仝　第二期　一回拂　金八　圓　也　全　五十二錢
仝　第一期　二回拂　各三圓八十錢　全　五十二錢
全　第二期　二回拂　各四圓三十錢　全　五十二錢
陽明學派　第一期　一回拂　金三圓三十錢　全　二十錢
古學派　第一期　一回拂　金參　圓　也　全　二十錢
朱子學派　第一期　一回拂　金貳　圓　也　全　十六錢
仏衷學派　第一期　一回拂　金壹　圓　也　全　十二錢
獨立學派　第一期　一回拂　金壹　圓　也　全　十二錢
清、韓、臺、樺、東京市內は無料　壹圓拾錢
靑圓拾錢
壹圓拾錢
壹圓拾錢
五十錢
五十錢
四十五錢
參拾五錢
參拾九錢
配達仕候

▲期限後は斷然正價金に拾四圓を復し分賣は御斷申候

▲尙明細書は御申込次第直に御送り申上候

▲學校圖書館必備書

▲文部省檢定受驗必讀書

◎申込所　東京市本鄕區本鄕一丁目（振替口座九三〇八）◎大阪東區備後町四丁目（振替口座六九一）寶文館◎其他全國有名書肆

◎今や世は物質的の弊害に堪へず人は精神界の麵麭に喝仰す◎

毎月一回一日發行五月一日四號發行
價一冊十五錢 稅一錢六冊 共九十錢

第一卷

アカネ

第四號

發行所 東京本郷區駒込千駄木町五十番地 根岸短歌會

柿本人麿の生活と其作歌

三井 甲之

其經歷、其時代　悲慘の運命、無常觀、作歌の秘訣　憶良との比較　彼の歌の特色、彼の死

新婚後

フローベール作　廣瀨靑波譯

佛蘭西自然主義作家　巨人の作也。精密なる逐字譯にして原文の文體上の興趣を發揮して遺憾なし、其內容亦日本現代の自然派の作物の如きものに非ず。

募集短歌俳句長詩

其他諸同人の短歌俳句の雜詠等現代韻文界に於て他と選を異にす。

和歌入門

三井 甲之

初學者のため自己の實驗より丁寧に作歌の法を說けるもの也。

評論

編輯 同人

●夏目漱石氏の「創作家の態度」●戀愛と生慾●最近の小說●過去現在未來●日本韻文の將來

俳趣味論

大須賀乙字

現時俳壇の異彩也。

月刊雜誌

光

一ヶ月金三錢 半ヶ年金十六錢 一ヶ年金三十二錢 郵稅 要海外一ヶ年金三十錢 郵稅共十錢以上ノ特割引ス 前金にあらざれば發送せず 振替貯金にての送付は口座料二錢を要す

郵稅代用券 割引一割增

親鸞聖人紀念號

降誕會御遠忌の最好施本

◎論說　△大慈悲の權化　近藤純悟　△如來の救濟　佐々木祐言

◎感想　△偉大なる宗敎改革家　谷本富　△吉水入室の日を如何　赤松連城　△いと難有瑞興敎群　△何とも申兼ます　村上專精　△時機適合の宗敎　吉谷覺壽　△溢るゝばかり感謝　藤野哲雄　△眼光背を貫く　南條文雄　△感佩限りなし　千輪性雄　△親鸞聖人の讃德　近角常觀　△蘭林遊戲の行　鈴木法深　△嗚呼見眞なる哉　菅原苦巖　△時機自然の要求　石黑慶信　△私一人のため　安藤州一　△聖人在すや否や　野々村直太郎　△井上慈曠の敎訓　武內青巒　△仰ぐべし信の六大美點　△卓見中の卓見　大內青巒　△仰ぐべし信次郎　△見眞大師贊　大名譽　△一武士日下ずべし　大須賀乙字　△末世の明燈　前田慧雲

◎講話　○親鸞聖人の人格　鈴木法深

◎嘆咏　○俳句　若葉會　○四香漫吟　井上慈曠　○早稻田の里　愚佛生　○見眞大師御遠忌　辻本寶

◎家庭　○聖人と其化導　芝無存

◎感謝　○拔苦與樂　山本康伯

◎彙報　○神戶たより　○岐路たより　○編輯たより　○新刊紹介　○其他

發行所　神戶市中山手通四丁目二十二番地　靈光社（振替貯金口座一〇五一〇番）

賣捌　京都西六條興敎書院　神戶元町五丁目日東館

近角常觀著（近刊之豫定）

信仰之餘瀝

定價拾五錢　郵稅貳錢

近角常觀著（再版準備中）

人生と信仰

定價貳拾錢　郵稅貳錢

近角常觀校訂（再版）

冠頭 歎異鈔

一冊郵稅共七錢（定價五錢郵稅二錢）但三冊までは郵稅貳錢

發行所　東京市本郷區森川町一番地　求道發行所

近角常觀著（第四版）

懺悔錄

定價貳拾錢　郵稅貳錢

發行所　東京市本郷區眞砂本町二丁目二十一番地　森江分店

賣捌所　東京市本郷區森川町一番地　求道發行所

規定

一、本誌は毎月一回一日發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
但郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一冊に付五厘
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	

●廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便局」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治四十一年四月廿八日印刷
明治四十一年五月一日發行

發行兼編輯人　近角常觀
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地

發行所　求道發行所
東京市神田區表神保町

大賣捌所　東京堂

前號要目

◎如來　求道感謝

◎大聖の降誕　講話◎夢殿

◎法王は唯一法なり

◎デヤーダカ聖僧傳　釋尊傳

◎我は罪惡の凝塊也　講話　第七章　第八章　自然論なる生涯　マルーデヤカ

◎獄異鈔　第七章　近角常觀

中里庄五郎　近角常觀

◎信仰生活の味ひ　雜錄

信仰の發現
信仰の熱中
信仰の實際
信仰の試驗
信仰に入る第一階梯
人生は波瀾多くない

近角常觀

◎眞宗奠嚔　十一　往還廻向

◎◎深夜笛を吹して（短歌）
◎◎淨けさ（同）
◎◎淨盤（長詩）

◎來年春期時學道の目標◎求道談話

增田八風　增田甲之

求道傳五卷第五號　明治四十年十一月十二日第三種郵便物認可　明治四十一年五月一日發行（毎月一回一日發行）